

専門教育科目

前期課程 1期 英語学研究Ⅰ 音声学・音韻論

斎藤 弘子

授業概要並びに到達目標

授業概要：

国際共通語としての英語の視点から、英語発音教育の理論と実践について見ていく。Jennifer Jenkins が提唱した Lingua Franca Core (LFC) を説明し教育の場面で応用することを目的に書かれた Robin Walker の Teaching the Pronunciation of English as a Lingua Franca (2010) を読み進めながら、LFC を使った 発音教育の可能性と限界について考察する。

★第14週は双方向のオンライン形式で授業を行う。

到達目標：

LFC の構成要素・理論的根拠・教育的意義を理解し、批判的に評価できるようになる。

そのために必要な英語音声学の知識を整理し、説明できるようになる。

この授業に参加するためには、音声学についての知識とテキストを読みこなす英語力は必須で、準備に180分程度の時間をかける必要がある。

なお、AI の使用については授業冒頭で指導者が説明する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(本授業の進め方について)
- 第2回 これまでの「英語」、こんにちの「英語」
- 第3回 国際共通語としての英語
- 第4回 英語の発音－変種、「訛り」、「通じる」英語とは
- 第5回 国際共通語としての英語発音とは？3つのアプローチ
- 第6回 J.Jenkins の Lingua Franca Core (LFC)
- 第7回 LFC の子音
- 第8回 LFC における子音連続
- 第9回 LFC の母音
- 第10回 核強勢の配置
- 第11回 LFC 外の項目と理解度への影響
- 第12回 ELF という考え方への批判
- 第13回 ELF 発音を教える利点
- 第14回 【オンライン】これまでに扱ってきた項目について学生からの質問・意見、ディスカッション
- 第15回 レポート執筆の準備

成績評価基準

成績は、以下のことを基準に評価します：

期末レポート 70%

授業のための準備 30%

教科書(参考書)

次の文献を読みます。

Robin Walker: Teaching the Pronunciation of English as a Lingua Franca, Oxford University Press, 2010.

他に必要な参考書については、そのつど紹介します。

前期課程 2期 英語学研究Ⅱ 音声学・音韻論

斎藤 弘子

授業概要並びに到達目標

授業概要：

国際共通語としての英語の視点から英語発音教育の理論と実践について考える。Lingua Franca Core を実践に移す際の問題点と解決策を述べた Robin Walker の著書の後半を読み進めながら、LFC を使った 発音教育の可能性と限界について、具体例を参照する。

★第14週は双方向のオンライン形式で授業を行う。

到達目標：

LFC の構成要素・理論的根拠・教育的意義を理解し、発音教育について自分の考えを述べることができるようになる。

そのために必要な英語音声学の知識を整理し、説明できるようになる。

本授業は1期に開講した同一教員の英語学研究Ⅰ(音声学・音韻論)を踏まえたものであるが、1期の履修は必要条件ではない。但し、音声学についての知識とテキストを読みこなす英語力は必須で、準備に180分程度の時間をかける必要がある。

AI の使用については授業冒頭で指導者が説明する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(1期に見てきたことのまとめ)
- 第2回 国際共通語としての英語と Lingua Franca Core
- 第3回 LFC に向けられた現場の教員や音声学からの様々な反応
- 第4回 教師が抱く懸念①～⑤
- 第5回 教師が抱く懸念⑥～⑩
- 第6回 国際共通語としての英語・LFC を教える利点①～③
- 第7回 国際共通語としての英語・LFC を教える利点④～⑥
- 第8回 ELF 発音を教えるために必要な知識(1)英語発音の実態
- 第9回 ELF 発音を教えるために必要な知識(2)分節音・超分節音の教授法
- 第10回 学習者の母語と ELF
- 第11回 日本語を母語とする学習者の場合
- 第12回 ○○語を母語とする学習者の場合(日本語以外の言語を取り上げる)
- 第13回 まとめ
- 第14回 【オンライン】これまでに扱ってきた項目について学生からの質問・意見、ディスカッション
- 第15回 レポート執筆の準備

成績評価基準

成績は、以下のことを基準に評価します：
期末レポート 70%
授業のための準備 30%

教科書(参考書)

次の文献を読みます。
Robin Walker: Teaching the Pronunciation of English as a Lingua Franca, Oxford University Press, 2010.

他に必要な参考書については、そのつど紹介します。

前期課程 1期	英語学研究Ⅲ 統語論
------------	---------------

川原 功司

授業概要並びに到達目標

この講義では、形式統辞論の基礎を身につけるために、精密にテキストを読み、内容を把握し、批判的に分析できる基礎力を養う。そのためにチュートリアル方式を採用し、受講者は毎回の出題範囲についてハンドアウトを使用し、議論の素地を十全に準備してることが求められる。最低でも、事前・事後学習として3時間以上の学習時間を想定している。なお、14回目はオンライン授業を予定している。なお、生成AIの利用は辞書等に準ずる形で認めるが、理解度を口頭で確認するため、「成果物」と本人の理解度に隔離が見られた場合、不正行為と見なす。

授業計画

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：容認性判断と言語構造に関連する要因
- 第3回：言語構造を構成する要因
- 第4回：依存文法
- 第5回：品詞
- 第6回：局所性
- 第7回：局所性への制約
- 第8回：依存要素間の距離と文法
- 第9回：言語の形式理論
- 第10回：変換生成文法
- 第11回：移動と制約
- 第12回：言語と思考
- 第13回：言語と脳
- 第14回：言語とコミュニケーション
- 第15回：言語と知性

成績評価基準

毎回のチュートリアルの出来100%で評価する。

教科書(参考書)

以下のテキストを使用する(ハードカバー、ペーパーバック、電子版、何でも可。なお、Free Access なので電子版であれば無料

https://tedlab.mit.edu/tedlab_website/researchpapers/Syntax_Gibson_MITPress_2025.pdf。

Edward A. F. Gibson. 2026. Syntax A Cognitive Appraoch. MIT Press.

前期課程 2期	英語学研究Ⅳ 統語論
------------	---------------

川原 功司

授業概要並びに到達目標

この講義では、形式統辞論の基礎を身につけるために、精密にテキストを読み、内容を把握し、批判的に分析できる基礎力を養う。そのためにチュートリアル方式を採用し、受講者は毎回の出題範囲についてハンドアウトを使用し、議論の素地を十全に準備してることが求められる。最低でも、事前・事後学習として3時間以上の学習時間を想定している。なお、14回目はオンライン授業を予定している。また、生成AIの使用は辞書に準ずる形で使用を認めるが、成果物と本人の理解に隔離が見られた場合には不正行為と見なす。

授業計画

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：集合
- 第3回：ラベル
- 第4回：部品
- 第5回：局所性
- 第6回：再帰性
- 第7回：Wh- 島の制約
- 第8回：名詞島の制約
- 第9回：名詞の移動
- 第10回：冠詞と名詞句の構造
- 第11回：主語制約
- 第12回：抜き出し領域における条件
- 第13回：フェイズとエッジ
- 第14回：メレオロジー
- 第15回：まとめ

成績評価基準

毎回のチュートリアルの出来100%で評価する。

教科書(参考書)

以下のテキストを使用する(ハードカバー、ペーパーバック、電子版、何でも可。なお、電子版はOpen Access なので無料である)。

David Adger. 2025. Mereological Syntax. MIT Press.

授業概要並びに到達目標

言語学における意味論と語用論の入門の授業。今期は認知言語学の考え方に従って語や文の意味について学んでいく。科学的な目で言語を見ることができるようになることを目標とする。主に英語と日本語を例に考察する。毎回、異なるトピックを取り上げて講義する。同時に教科書を読み進めることによって理解を深める。教科書の各章にある練習問題を解き、また、授業で取り上げる内容に関連した小レポートを出してもらい、理解を確かめる。

生成 AI については、以下の使い方を認める。

- 課題に取り組むために、日本語と英語に関する資料収集のために用いる。
- 生成 AI の答えを批判的に評価するために用いる。

以下の使い方は認めない

- 課題やレポートについて生成 AI に答えてもらい、その文章をそのまま、あるいは修正して提出すること。

授業計画

- 第1回 意味論導入
- 第2回 ことばの意味と世界観
- 第3回 百科事典的知識
- 第4回 意味カテゴリー1 (古典的カテゴリー観とプロトタイプ)
- 第5回 意味カテゴリー2 (プロトタイプ)
- 第6回 特別授業Ⅰ: 移動動詞の性質とその意味論(オンデマンド授業として実施する)
- 第7回 概念メタファー1
- 第8回 概念メタファー2
- 第9回 概念メトニミー
- 第10回 意味の変化と拡張
- 第11回 特別授業Ⅱ: 移動動詞の性質と第二言語習得(オンデマンド授業として実施する)
- 第12回 多義性
- 第13回 多義性
- 第14回 まとめ(オンライン授業として実施する)
- 第15回 期末レポート解説

成績評価基準

出席15%、毎週の課題45%、期末レポート40% で計算する。

教科書(参考書)

『ファンダメンタル認知言語学』 野村益寛 著 ISBN: 978-4-89476-608-2 ひつじ書房
『認知意味論』 松本曜 編 ISBN: 9784469212839 大修館書店

授業概要並びに到達目標

言語学における意味論と語用論の入門の授業。認知言語学の考え方に従って文法と意味の関係について考察し、さらには文脈における意味について学んでいく。科学的な目で言語を見ることができるようになることを目標とする。主に英語と日本語を例に考察する。毎回、異なるトピックを取り上げて講義する。同時に教科書を読み進めることによって理解を深める。教科書の各章にある練習問題を解き、また、授業で取り上げる内容に関連した小レポートを出してもらい、理解を確かめる。

生成 AI については、以下の使い方を認める。

- 課題に取り組むために、日本語と英語に関する資料収集のために用いる。
- 生成 AI の答えを批判的に評価するために用いる。

以下の使い方は認めない

- 課題やレポートについて生成 AI に答えてもらい、その文章をそのまま、あるいは修正して提出すること。

授業計画

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 品詞と意味
- 第3回 コロケーション
- 第4回 構文の意味(二重目的語構文)
- 第5回 構文の意味(他動詞構文)
- 第6回 文法化と意味の希薄化
- 第7回 音象徴とオノマトペ
- 第8回 音象徴とオノマトペ(オンデマンド)
- 第9回 日英比較 動詞における語彙化 状態変化と使役
- 第10回 日英比較 動詞における語彙化 様態と経路
- 第11回 語用論入門 直示表現
- 第12回 発話行為
- 第13回 会話の含意と丁寧表現
- 第14回 まとめ(オンライン)
- 第15回 期末レポート解説

成績評価基準

出席15%、毎週の課題45%、期末レポート40% で計算する。

教科書(参考書)

『ファンダメンタル認知言語学』 野村益寛 著 ISBN: 978-4-89476-608-2 ひつじ書房
『認知意味論』 松本曜 編 ISBN: 9784469212839 大修館書店

授業概要並びに到達目標

心理言語学は、名の示す通り心理学と言語学の分野横断的な研究領域ですが、通常は言語学研究者が検証すべき問題を提示して、それに対して心理学研究者が心理学的解釈と実験手法を提供します。心理言語学の領域は非常に広く、すべてをカバーすることはできませんが、この講義では、言語学のなかでの心理言語学の位置づけを見てから、具体的なトピックとして、幼児の言語獲得について、学んでいきます。具体的には、Scientific Americana に掲載された、Breyne Arlene Moskowitz の The Acquisition of Language と Peter A. and Jill G. de Villiers の Early Language のいくつかの章を精読します。授業目的は言語獲得に関わる基本的な事実とその解釈・説明を考察することにあります。なお14週目はオンライン双方向授業です。また生成 AI については、疑問点や発展的問題を調べる時に補助的に利用してください。

授業計画

- 1 回目 The nature of language (1)
- 2 回目 The nature of language (2)
- 3 回目 Language and structure (1)
- 4 回目 Language and structure (2)
- 5 回目 Introduction
- 6 回目 Prerequisites for language, Caretaker speech, Correcting language
- 7 回目 The one-word stage, The two-word stage. Telegraphic speech
- 8 回目 Function words, Plurals, Negative sentences
- 9 回目 Semantics, Phonology, Phonetics, Abnormal language development
- 10 回目 Rules
- 11 回目 Relationships
- 12 回目 Freedom of speech
- 13 回目 Crucial experiences
- 14 回目 Constraints on learning
- 15 回目 Conclusion

成績評価基準

毎回受講者に輪番で上記文献の購読を指定する。またその発表を元に全員で議論をおこなう。以上の平常点で成績を評価する。

教科書(参考書)

プリントを用意する。

授業概要並びに到達目標

言語研究は、記号体系としての構造を明らかにする一方で、社会の中での実際の言語使用にも目を向けなければならない。この講義では特にジェンダーと言語の関係の焦点を当て、男女の言語差を社会における女性の低い地位が反映したものと主張する Robin Lakoff のパイオニア的な論考を精読する。時間が許せば、これとは異なり、男女は言語において異なった下位グループに属し、男女の会話は異文化コミュニケーションであるという、Deborah Tannen のデュアルカルチャーアプローチを垣間見たいと思う。第14週は双方向オンラインで授業を実施する。なお生成 AI は発展的問題を調査する場合等に使用を許可する。

授業計画

- 1 回目 Lakoff (総説 1)
- 2 回目 同 (総説 2)
- 3 回目 同 (総説 3)
- 4 回目 同 (語彙の性差 1)
- 5 回目 同 (語彙の性差 2)
- 6 回目 同 (音声と統語)
- 7 回目 同 (呼称等)
- 8 回目 同 (意味 1)
- 9 回目 同 (意味 2)
- 10 回目 同 (分析)
- 11 回目 同 (結論)
- 12 回目 Lakoff (2010)
- 13 回目 Tannen (1)
- 14 回目 Tannen (2)
- 15 回目 Tannen (3)

成績評価基準

毎回、受講生に輪番で講読を指名する。その発表にもとづいて全員がディスカッションをおこなう。これらの授業への積極的な参加をもって成績を評価する。

教科書(参考書)

Lakoff, R. (1971) Language and Women's Place
Tannen, D. (1990) You just don't understand!

授業概要並びに到達目標

①英語教育に関する研究能力と英語授業実践に関わる専門的能力を養うことを目標にする。この授業では、第二言語教授・学習における言語習得、学習者要因、伝達能力と言語技能、評価について、英語学と英語教育学の研究成果をふまえて、

理論と実践の両面から研究を行う。具体的には、研究論文等を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行うとともに教育実践への示唆を得る。併せて、英語教育の研究法についても理解を深めるようにする。

②第1回～第13回、第15回の授業は対面で行う。第14回はオンラインで行う。

③生成 AI の利用については、別途指示する。

授業計画

- 第1回 授業内容の説明と計画
- 第2回 研究方法(質的研究・量的研究・混合法)
- 第3回 言語習得(先行研究)
- 第4回 言語習得(研究結果)
- 第5回 言語習得(考察と課題)
- 第6回 学習者要因(先行研究)
- 第7回 学習者要因(研究結果)
- 第8回 学習者要因(考察と課題)
- 第9回 伝達能力と言語技能(先行研究)
- 第10回 伝達能力と言語技能(研究結果)
- 第11回 伝達能力と言語技能(考察と課題)
- 第12回 評価(先行研究)
- 第13回 評価(研究結果)
- 第14回 評価(考察と課題)
- 第15回 研究課題の整理と考察

成績評価基準

授業中の取り組み、課題への対応状況、レポートの成績を総合的に判断して行う。

教科書(参考書)

教科書は使用しない。資料を配付する。
参考書については初回の授業で説明する。

前期課程 2期	英語教育法研究Ⅱ 教育方法論
------------	-------------------

佐取 美紀

授業概要並びに到達目標

- ①英語教育に関する研究能力と英語授業実践に関わる専門的能力を養うことを目標にする。この授業では、第二言語教授・学習における言語習得過程、指導理論と指導法、伝達能力と4技能、テスト法について、英語学と英語教育学の成果をふまえて、教育方法論の研究を行う。具体的には、内外の研究論文、教育実践の研究論文を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行うとともに教育実践の課題解決に向けて研究成果の活用を検討する。併せて、英語教育の研究法についても理解を深めるようにする。
- ②第1回～第13回、第15回の授業は対面で行う。第14回はオンライン(Google Meetでの同時双方向型)で行う。受講登録をした受講生には大学の電子メールで授業の前日までにGoogle MeetのURLを連絡する。

③生成 AI の利用については、別途指示する。

授業計画

- 第1回 授業内容の説明と計画
- 第2回 研究方法(理論研究、実験研究、実践研究)
- 第3回 言語習得過程(先行研究)
- 第4回 言語習得過程(研究結果の分析)
- 第5回 言語習得過程(研究成果の活用)
- 第6回 指導理論と指導法(先行研究)
- 第7回 指導理論と指導法(研究結果の分析)
- 第8回 指導理論と指導法(研究成果の活用)
- 第9回 伝達能力と4技能(先行研究)
- 第10回 伝達能力と4技能(研究結果の分析)
- 第11回 伝達能力と4技能(研究成果の活用)
- 第12回 テスト法(先行研究)
- 第13回 テスト法(研究結果の分析)
- 第14回 テスト法(研究成果の活用)
- 第15回 研究課題の整理と考察

成績評価基準

授業中の取り組み、課題への対応状況、レポートの成績を総合的に判断して行う。

教科書(参考書)

教科書は使用しない。資料を配付する。

前期課程 1期	英語教育法研究Ⅲ 外国語学習理論Ⅰ
------------	----------------------

田地野 彰

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉

講義では第二言語習得に関与する様々な要因について考究する。第二言語習得研究についての多様な研究成果を詳細に分析、解釈することにより、日本における外国語習得の現状理解、および生成 AI・ICTを活用した学習法、今後の研究方法などについての理解を深めることを目的とする。授業は、基本的に対面で行います(第14週目の授業はオンラインで実施予定)

〈到達目標〉

第二言語習得関係の研究論文などを理論的、批判的に読むアカデミックな読解力を養成する。事前学習にはテキスト本文の内容読解、テキスト内容への批判的思考などで180分以上が必要となる。

AIの利用については第1週のオリエンテーションで説明する。

授業計画

- 第1回 Language, Learning, and Teaching (1) Questions about SLA
- 第2回 Language, Learning, and Teaching (2) Language and

Teaching

- 第3回 Language, Learning, and Teaching (3) Three Perspectives on SLA
- 第4回 First Language Acquisition (1) Behavioral Approach
- 第5回 First Language Acquisition (2) Nativist Approach
- 第6回 First Language Acquisition (3) Functional Approach and Issues in FLA
- 第7回 Age and Acquisition (1) The Critical Period Hypothesis
- 第8回 Age and Acquisition (2) Cognitive and Affective Considerations
- 第9回 Age and Acquisition (3) Linguistic Considerations
- 第10回 Human Learning (1) Fundamental Concepts in Language Learning
- 第11回 Human Learning (2) Language Aptitude
- 第12回 Human Learning (3) Learning Theories
- 第13回 Individual Differences (1) Learning Styles
- 第14回 Individual Differences (2) Learning Strategies
- 第15回 Individual Differences (3) Strategies-Based Instruction

成績評価基準

成績評価は発表と課題など(50%) および学期末レポート(50%)で行うものとする。

教科書(参考書)

教科書

- ・ Lightbown, P.M. & Spada, N. (2013) How Languages Are Learned. (OUP) ISBN-13: 978-0194541268

参考図書

- ・ 鈴木孝明・白畑知彦(2012)『ことばの習得－母語獲得と第二言語習得』(くろしお出版)ISBN978-4-87424-544-6
- ・ 新多丁・馬場今日子(2016)『はじめての第二言語習得論講義』(大修館)ISBN978-4469246087

前期課程 英語教育法研究Ⅳ 2期 外国語学習理論2

田地野 彰

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉

本授業では外国語学習に関わる諸要因を扱った研究を概観し、外国語学習研究の全体像について考究する。外国語学習論におけるこれまでの研究の歴史や概要についてまとめた論文や専門書を通して、基本的な概念を理解し、批判的思考力や読解力の育成をめざす。事前学習には論文の要旨作成などを含め180分以上が必要である。(参考文献は「教科書欄」に掲載。)

〈到達目標〉

英語教育・指導の観点から外国語学習に関する研究成果の活用についての理解を深める。

〈授業方法〉

基本的に対面にて授業を行います(第14週目の授業はオンラインで実施予定)。なお、資料の配信については Google Classroom を使う予定です。

AI の利用については第1週のオリエンテーションで説明する。

授業計画

- 第1回 SLA 理論
- 第2回 SLA の研究方法
- 第3回 第二言語知識の本質
- 第4回 第二言語教室でのインタラクション
- 第5回 フォーカス・オン・フォーム
- 第6回 第二言語教室における社会文化理論
- 第7回 文法の習得
- 第8回 文法の習得(教育的示唆)
- 第9回 語彙の習得
- 第10回 発音の習得
- 第11回 語用知識の習得
- 第12回 ISLA の環境
- 第13回 個人差と ISLA
- 第14回 研究と教育実践のつながり
- 第15回 指導への示唆

成績評価基準

成績評価は、発表や課題など(50%)、および最終レポート(50%)で行うものとする。

教科書(参考書)

〈教科書〉

- 佐野富士子ほか(2022)『学びの場での第二言語習得論』(開拓社) ISBN978-4-7589-2362-0

〈参考図書・資料〉

- Ellis, R. (2015) Understanding Second Language Acquisition. (OUP) ISBN-13: 978-0194422048
- Loewen, S. (2020) Introduction to Instructed Second Language Acquisition (2nd ed.). Routledge. ISBN: 978-1138-67178-2

前期課程 英語圏文化研究Ⅰ 1期 アメリカの小説と文化

梅垣 昌子

授業概要並びに到達目標

20世紀の前半にハリウッドの脚本家としても活動していたアメリカ南部の作家ウィリアム・フォークナーは、架空の土地ヨクナパトーフアを舞台とする作品を多数執筆しノーベル文学賞を受賞した。また東西の冷戦期にアメリカ政府の文化広報活動に関わり、日本をはじめとする世界各地を訪れている。この授業では、フォークナーおよびフォークナーの影響を受けた作家たちの作品を精密に読み込むことにより、グローバル化時代にお

ける地域性および空間と場所の概念について考察する。また、フォークナー作品の読解にあたって重要な語りの問題に注目し、語られる内容と語られ方の関係性について考察を深める。その過程で和文および英文の文学批評を熟読し、適切な様式を用いながら先行研究を踏まえた論文作成をめざす。毎回の授業のための準備として作品や資料の読解および読解内容についての考察が必須である。

授業計画

- 第1回 講義内容の説明と計画(※本授業における AI の使用方法については、初回授業で説明する。)
- 第2回 物語の構造分析1 (19世紀アメリカ文学の系譜)
- 第3回 物語の構造分析2 (20世紀アメリカ文学の系譜)
- 第4回 物語の構造分析3 (モダニズムとポストモダニズム)
- 第5回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解1 (The Country)
- 第6回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解2 (The Village)
- 第7回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解3 (The Wilderness)
- 第8回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解4 (The Wasteland)
- 第9回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解5 (The Middle Ground)
- 第10回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解6 (Beyond)
- 第11回 フォークナーと文学批評1 (フォークナーと日本1)
- 第12回 フォークナーと文学批評2 (フォークナーと日本2)
- 第13回 フォークナーと文学批評3 (フォークナーとラテンアメリカ)
- 第14回 フォークナーと文学批評4 (フォークナーとヨーロッパ) →この回のみオンライン(ZOOM)で遠隔授業を行います
- 第15回 まとめと考察：研究課題と成果の確認

成績評価基準

授業準備の成果をふまえた授業中の取り組みと考察結果の発表(40%)および3回のレポート課題(60%)により総合的に評価する。

教科書(参考書)

- 1) William Faulkner. Collected Stories. Vintage 2009.
- 2) 随時資料を配布する
- 3) 参考書については授業で課題ごとに指定する

前期課程 2期	英語圏文化研究Ⅱ アメリカの小説と文化
------------	------------------------

梅垣 昌子

授業概要並びに到達目標

20世紀の前半にハリウッドの脚本家としても活動していたアメリカ南部の作家ウィリアム・フォークナーは、架空の土地ヨク

ナパトーフアを舞台とする作品を多数執筆しノーベル文学賞を受賞した。また東西の冷戦期にアメリカ政府の文化広報活動に関わり、日本をはじめとする世界各地を訪れている。この授業では、小説家としてだけでなく、脚本家としても活躍したフォークナーの作品を精密に読み込むことにより、技術革新の時代における表現方法の可能性と多様性について考察する。また、フォークナー作品の読解にあたって重要な語りの問題に注目し、語られる内容と語られ方の関係性について考察を深める。その過程で和文および英文の文学批評を熟読し、適切な様式を用いながら先行研究を踏まえた論文作成を行う。毎回の授業のための準備として作品や資料の読解および読解内容についての考察が必須である。

授業計画

- 第1回 講義内容の説明と計画(※本授業における AI の使用方法については、初回授業で説明する。)
- 第2回 アメリカ文学とナラトロジー1 (モダニズムとポストモダニズム)
- 第3回 アメリカ文学とナラトロジー2 (長編と短編)
- 第4回 アメリカ文学とナラトロジー3 (映像作品)
- 第5回 作品の読解1 (The Country) “Barn Burning”
- 第6回 作品の読解2 (The Village) “Dry September”
- 第7回 作品の読解3 (The Wilderness) “Lo!”
- 第8回 作品の読解4 (The Wasteland) “Turnabout”
- 第9回 作品の読解5 (The Middle Ground) “Mountain Victory”
- 第10回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解6 (Beyond) “Carcassonne”
- 第11回 フォークナーと文学批評1 伝記的アプローチ(導入)
- 第12回 フォークナーと文学批評2 伝記的アプローチ(実践)
- 第13回 フォークナーと文学批評3 作品論(導入)
- 第14回 フォークナーと文学批評4 作品論(実践) →この回のみオンライン(ZOOM)で遠隔授業を行います
- 第15回 まとめと考察：研究課題と成果の確認

成績評価基準

授業準備の成果をふまえた授業中の取り組みと考察結果の発表(40%)および期末レポートとその準備に向けた課題(60%)により総合的に評価する。

教科書(参考書)

- 1) William Faulkner. Collected Stories. Vintage 2009.
- 2) 随時資料を配布する
- 3) 参考書については授業で課題ごとに指定する

前期課程 1期	英語圏文化研究Ⅲ イギリス文化論
------------	---------------------

岡田 新

授業概要並びに到達目標

20世紀初頭のイギリス現代史についての専門書を読む。

イギリス現代史の専門書を読み、イギリスの現代政治の形成についてディスカッションする。
google classroom で連絡を行う。
John Grigg Lloyd George The People's Champion 1902-1911を
分担して読み、訳をつくり、固有名詞などをしらべて注をつける。
疑問点をあげ、ディスカッションを通じてイギリス現代政治の形成の諸論点について理解を深める。
辞書をひき、自分で読解する訓練なので AI は使わないこと。

授業計画

- 1 introduction 授業の仕方 ウェールズとロイド・ジョージ
- 2 Background 19世紀末から20世紀初頭のロイド・ジョージ
- 3 講読と討論 Last Steps to Power
- 4 講読と討論 Extreme danger
- 5 講読と討論 War Cabinet
- 6 講読と討論 Conference at Calais
- 7 講読と討論 Crisis at Sea
- 8 講読と討論 America Comes in
- 9 講読と討論 Nivelle's Nemesis
- 10 講読と討論 Electoral Reform
- 11 講読と討論 Farming and Food
- 12 講読と討論 Honours
- 13 講読と討論 Haig gets His Way
- 14 講読と討論 New Appointment (オンライン授業)
- 15 講読と討論 Arthur Henderson and Neville Chamberlain

成績評価基準

平常点 50%
レポート 50%

教科書(参考書)

John Grigg Lloyd George The People's Champion 1902-191
プリントで配布する。

前期課程 2期	英語圏文化研究Ⅳ イギリス文化論
------------	---------------------

岡田 新

授業概要並びに到達目標

20世紀初頭のイギリス現代史についての専門書を読む。
イギリス現代史の専門書を読み、イギリスの現代政治の形成についてディスカッションする。
google classroom で連絡を行う。
John Grigg Lloyd George The People's Champion 1902-1911を
分担して読み、訳をつくり、固有名詞などをしらべて注をつける。
疑問点をあげ、ディスカッションを通じてイギリス現代政治の形成の諸論点について理解を深める。
辞書をひき、自分で読解する訓練なので AI は使わないこと。

授業計画

- 1 introduction 授業の仕方 ウェールズとロイド・ジョージ

- 2 Background 19世紀末から20世紀初頭のロイド・ジョージ
- 3 講読と討論 Last Steps to Power
- 4 講読と討論 Extreme danger
- 5 講読と討論 War Cabinet
- 6 講読と討論 Conference at Calais
- 7 講読と討論 Crisis at Sea
- 8 講読と討論 America Comes in
- 9 講読と討論 Nivelle's Nemesis
- 10 講読と討論 Electoral Reform
- 11 講読と討論 Farming and Food
- 12 講読と討論 Honours
- 13 講読と討論 Haig gets His Way
- 14 講読と討論 New Appointment (オンライン授業)
- 15 講読と討論 Arthur Henderson and Neville Chamberlain

成績評価基準

平常点 50%
レポート 50%

教科書(参考書)

John Grigg Lloyd George The People's Champion 1902-191
プリントで配布する。

前期課程 2期	英語圏文化研究Ⅵ ニュージーランド文化論
------------	-------------------------

Simon J. Humphrey

授業概要並びに到達目標

The focus will be on New Zealand culture. It will be divided into three sections dealing with the History, Language, and Culture of New Zealand.
Students should spend 180 minutes outside of class reading, summarizing, and reviewing the reading material for their next class. Students will be expected to take an active participation in the weekly discussions.

授業計画

The whole course will be taught in English only. There will be an assessment every 5th week.
During this course, the students will become acquainted with the History, Language, and Culture of New Zealand (See below for details). Students should be prepared to take an active role in class discussions, debating the relevant issues they have read about. Students will learn to read with a critical eye, as well as form opinions based on sound judgement. Guidance and assistance will be provided throughout the semester.

Generative AI use is permitted under specific conditions. To use AI for warm-up activities, brainstorming, might be permissible but having AI to your write assignments or generate your presentation slides would not be permissible.

Week 1: Orientation

Weeks 2-12: Guidance for Report writing, Reading, Discussing, and Doing the weekly reading worksheets

Week 14: Class will be online via Zoom

Week 15: Feedback

The course is divided into 3 sections with a report for each:

History:

Māori settlement

European discovery

Treaty of Waitangi

British control

Presentation/Discussion/Assignment

Language:

Māori Language revival

New Zealand English: accent

New Zealand English: vocabulary

TV, Film and literature

Presentation/Discussion/Assignment

Culture:

British influence

Māori customs

Sports

Lifestyle

Presentation/Discussion/Assignment.

成績評価基準

・ Assignments: 75%

・ Participation during in-class discussions: 25%

教科書(参考書)

None: All materials will be provided by the lecturer.

前期課程 日本語学研究Ⅰ 1期 日本語学概論

早津 恵美子

授業概要並びに到達目標

- 授業概要：日本語の文法構造について概観したあと、具体的な言語現象について考察する。
- 到達目標：日本語の文法現象について「規則・きまり」を受動的に覚えるというのではなく、自らが使用し接する日本語について実態を内省しながら考えることによって、そこにひそむ法則的なものを見いだしていく力を身につける。
- 授業形態：第14週の授業は zoom によるオンライン(リアルタイム)で行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本

語学概論(2026-1)」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示等に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom への招待メールを送るので各自でアクセスして準備すること。

- 本授業では、担当教員が許可した場合に限り、生成 AI の利用を許可する。具体的な使用の範囲については、授業中に適宜説明する。

授業計画

- 1) 授業の説明と計画
- 2) 語彙と文法(日本語学の分野)
- 3) 単語・文・文法
- 4) 単語の語彙的な性質と文法的(形態論的)な性質
- 5) 単語の語彙的な性質と文法的(構文論的)な性質
- 6) 文の内部構造(1. 要素の単語の形態的な構造)
- 7) 文の内部構造(2. 構文機能的な構造)
- 8) 文の内部構造(3. 構文意味的な構造)
- 9) 文の内部構造(4. 題述機能的な構造、「は」と「が」)
- 10) 品詞と文の成分
- 11) 品詞の転成
- 12) 小説の文章の分析(1. 要素の単語の形態)
- 13) 小説の文章の分析(2. 文の成分)
- 14) 小説の文章の分析(3. 単文・重文・複文)
※ zoom によるオンライン授業
- 15) まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業への貢献(50%)、レポート(50%)。

教科書(参考書)

プリント・資料を配布する。

前期課程 日本語学研究Ⅱ 1期(集中) 日本語談話研究

遠山 千佳

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉

本授業では、談話分析、会話分析の理論と分析を主要テーマとする。具体的には、言語学的観点、語用論、発話行為などから、文より大きい単位である「談話」の理解の仕方を学び、会話のしくみなど会話分析から社会文化的な相互行為の理解の仕方を学ぶ。その上で、実際に収集した会話データを分析し、発表を行う。

〈到達目標〉

1. 談話分析の基本的な理論を理解し、実際の談話を分析できる。
2. 会話文席の基本的な理論を理解し、実際の相互行為を分析できる。
3. 理論や文献講読を通して、研究課題を設定し、実際のデータを分析してまとめることができる。

＊生成 AI の使用について

生成 AI について、次のような使い方は認めない。

- ・課題の理解や整理をするために資料を要約したり翻訳したりする。
- ・課題回答の作成時に生成 AI が出力した文章を用いる。

以上について第 1 回授業ガイダンスで詳しく説明する。

授業計画

- 第 1 回 授業の概要(剽窃、生成 AI についてを含む)、談話分析(1)語用論、結束性、一貫性
- 第 2 回 談話分析(2)データ収集
- 第 3 回 談話分析(3)分析方法
- 第 4 回 談話分析(4)語用論、ポライトネス理論
- 第 5 回 談話分析(5)発話行為論
- 第 6 回 談話分析(6)会話の含意
- 第 7 回 会話分析(1)会話のしくみ
- 第 8 回 会話分析(2)聞き手からのフィードバック
- 第 9 回 談話分析、会話分析のまとめ
- 第10回 【演習】データの分析(1)
- 第11回 【演習】データの分析(2)
- 第12回 【演習】データの分析(3)
- 第13回 研究発表
- 第14回 研究発表
- 第15回 全体のまとめ

成績評価基準

課題 30%

全体の討議及びグループ活動等への参加度 30%

発表 40%

＊生成 AI が出力した文章・成果物をそのまま用いる行為は一切認めない。このルールに違反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

資料を配布する。

参考図書

デボラ・カメロン(林宅男監訳)(2012)『話し言葉の談話分析』ひつじ書房

山岡政紀・牧原功・小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現－日本語語用論入門』明治書院

高木智世・細田由利・森田笑(2016)『会話分析の基礎』ひつじ書房

授業概要並びに到達目標

話し言葉の分析や音声を刺激とした実験に関心のある学生を対象として、音声学および音韻論の基礎知識と、実際に音声信号を分析するための基礎的な技術を身につけてもらうことを目標とする。

人間の音声産出のメカニズム、物理的な信号としての音声の特徴、日本語話者の音声知覚の特性など、日本語の話し言葉の物理的側面と心理的側面について、要点を概説する。また、音響信号分析用のソフトウェアを利用して、実際に音声を録音して分析する演習を行う。受講生は各自ノート PC 持参のこと(音声分析のフリーソフト Praat が使えるもの)。

◆資料の提示や連絡のために classroom を使用するので、第 1 回授業までに履修登録者の NUFs メールに招待を送ります。第14週はオンライン授業で、zoom を使用します。

◆受講者の知識や関心に応じて進度や内容を調整します。

AI 使用の可否については授業時に指示します。

授業計画

- 第 1 回：受講ガイダンス
- 第 2 回：発声の仕組み
- 第 3 回：日本語の母音
- 第 4 回：調音の仕組みと日本語の子音
- 第 5 回：音声記号
- 第 6 回：音声と音韻
- 第 7 回：確認テスト 1 (母音と子音)
- 第 8 回：音声信号の特性(PC 持参)
- 第 9 回：音声分析のための基礎知識(母音と子音)(PC 持参)
- 第10回：音声分析のための基礎知識(スペクトログラム)(PC 持参)
- 第11回：アクセントの型(PC 持参)
- 第12回：複合語のアクセント(PC 持参)
- 第13回：イントネーション(PC 持参)
- 第14回：(オンライン)確認テスト 2 (アクセントとイントネーション)
- 第15回：まとめ

成績評価基準

以下の割合を目安に総合的に判定する。

確認テスト 1・2 (50%)

授業貢献度(50%)

教科書(参考書)

講義時に必要に応じて資料を配付し、参考文献を紹介する。

前期課程 2期 日本語学研究 V
日本語学特論

中北 美千子

授業概要並びに到達目標

日本語の文法現象や語用論的現象が話し言葉においてどのような音声の特徴をもって実現されているかを観察するための多様な視点と手法を学ぶことを目標とする。話し言葉の分析や音声刺激を使った実験に必要な技術の基礎を学び、演習や文献講読を行う。また、音響分析用のソフトウェアを利用して、実際に音声を録音して分析する演習を行うので、受講生は各自ノートPC 持参のこと(音声分析のフリーソフト Praat が使えるもの)。

- ◆資料の提示や連絡のために classroom を使用するので、第1回授業までに履修登録者の NUFS メールに招待を送ります。第14週はオンライン授業で、zoom を使用します。
- ◆受講者の知識や関心に応じて進度や内容を調整します。

AI 使用の可否については授業時に指示します。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
文献購読準備
- 第2回：発話機能・文末表現・文末イントネーション(PC 持参)
- 第3回：文献講読(ノイズ・非流暢性)
- 第4回：文献講読(フィラーの役割)
- 第5回：文献講読(フィラーの諸々)
- 第6回：文献講読(その他)
- 第7回：文献講読(話し言葉のデータ収集方法)
- 第8回：話し言葉のデータ収集方法検討
- 第9回：話し言葉のデータ収集準備
- 第10回：話し言葉の分析演習(ピッチ曲線)
- 第11回：話し言葉の分析演習(その他)
- 第12回：分析結果中間報告
- 第13回：分析結果発表
- 第14回：(オンライン)分析についてディスカッション
- 第15回：まとめと振り返り

成績評価基準

以下の割合を目安に総合的に判定する。
分析結果発表(50%)
授業貢献度(50%)

教科書(参考書)

講義時に必要に応じて資料を配付し、参考文献を紹介する。

前期課程 1期 日本語学研究 VI
日本語文法論

早津 恵美子

授業概要並びに到達目標

○授業概要：語彙と文法(構文論と形態論)とが関わる様々な現

象を確認し、語彙と文法をつなぐ要としてのカテゴリカルな意味について詳説し参加者と議論する。

- 到達目標：語彙の研究と教育においても文法の研究と教育においてもカテゴリカルな意味の理解が重要であることを具体的な現象の分析を通じて身につける。
- 授業形態：第14週の授業は zoom によるオンライン(リアルタイム)で行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本語文法論(2026-1)」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom への招待メールを送るので、各自でアクセスして準備すること。
- 本授業では、担当教員が許可した場合に限り、生成 AI の利用を許可する。具体的な使用の範囲については、授業中に適宜説明する。

授業計画

内容は以下のような予定である。ただし、参加者との相談によって微調整することがある。

- 1) ガイダンス：授業の説明と計画
- 2) 単語の語彙的な意味
- 3) 単語の文法的な意味
- 4) 単語のカテゴリカルな意味
- 5) 文法的な意味とカテゴリカルな意味
- 6) 構文論と形態論
- 7) 単語の形態論的な性質(命題的)とカテゴリカルな意味
- 8) 単語の形態論的な性質(陳述的)とカテゴリカルな意味
- 9) 単語の構文論的な性質とカテゴリカルな意味
- 10) 単語の多義性とカテゴリカルな意味
- 11) 語彙的な意味の多側面性とカテゴリカルな意味
- 12) 単語の類義性とカテゴリカルな意味
- 13) 単語の多義性とカテゴリカルな意味
- 14) 複合語とカテゴリカルな意味
※ zoom によるオンライン授業
- 15) まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業への貢献(50%)、レポート(50%)。

教科書(参考書)

プリント・資料を配布する。

前期課程 2期 日本語学研究 VIII
日本語語彙論

早津 恵美子

授業概要並びに到達目標

- 授業概要：単語には語彙的な性質と文法的な性質があり、単語は語彙・文法的な単位である。そのことについて文献を購読し議論するとともに、具体的にいくつかの単語(多義語、類義語)をとりあげて確認する。また参加者の調査・分析、

相互の議論によって理解を深める。

- 到達目標：日本語の語彙の性質について内省力や理解力が深まる。
- 授業形態：第14週の授業は zoom によるオンラインで行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本語語彙論(2026-2)」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom への招待メールを送るので各自でアクセスして準備すること。
- 本授業では、担当教員が許可した場合に限り、生成 AI の利用を許可する。具体的な使用の範囲については授業中に適宜説明する。

授業計画

- 1) ガイダンス：授業の説明と計画
- 2) 語彙・文法的な単位としての単語
- 3) 単語の語彙的な意味と文法的な意味(動詞)
- 4) 単語の語彙的な意味と文法的な意味(形容詞)
- 5) 文献1の購読(前半)
- 6) 文献1の購読(後半)
- 7) 多義語の分析(1)
- 8) 多義語の分析(2)
- 9) 文献2の購読(前半)
- 10) 文献2の購読(後半)
- 11) 類義語の分析(1)
- 12) 類義語の分析(2)
- 13) 参加者による分析結果の発表と議論(1)
- 14) 参加者による分析結果の発表と議論(2)
※ zoom によるオンライン授業
- 15) まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業中の分担発表と議論への貢献(50%)、学期末のレポート(50%)。

教科書(参考書)

プリント・資料を配布する。

前期課程 1期 日本語教育学研究 I 第二言語習得論

近藤 行人

授業概要並びに到達目標

I 期では、認知的アプローチに基づく第二言語習得研究を概観し、日本語教育研究者としての高度な研究能力養成を目指す。日本語教育の基礎科学として位置付けられる第二言語習得研究と日本語教育実践とのつながりについても受講生と議論して考えていく。

授業では、言語習得観、第一言語の影響、IIO モデル、個人差要因、教室習得研究について扱う。それぞれの分野における研究論文等を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行

うとともに、研究手法や教育実践についての示唆を得る。

なお、生成 AI について、例えば、課題回答の作成時に生成 AI が出力した文章をそのまま用いるなどのような使い方は認めない。

生成 AI を利用した場合は、何にどのように使用したか、使用前のプロダクトと使用後のプロダクトを合わせて提出する。

以上について授業中に詳しく説明する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
SLA 研究の歴史意義
- 第2回 母語習得に関する2つの理論：原理とパラメーターの
アプローチと用法基盤モデル
- 第3回 SLA における第一言語の影響(1)
- 第4回 SLA における第一言語の影響(2)
- 第5回 Krashen のモニターモデルから IIO モデルへ
- 第6回 個人差要因 年齢
- 第7回 個人差要因 適性
- 第8回 個人差要因 学習スタイル、学習ストラテジー、ビリーフ
- 第9回 個人差要因 動機づけ
- 第10回 教室における SLA(1)文法
- 第11回 教室における SLA(2)Focus on form
- 第12回 教室における SLA(3)語彙
- 第13回 教室における SLA(4)CBI と CLIL
- 第14回 SLA 研究の方法
※第14回の講義は ZOOM によるオンライン双方向形式で実施します。
- 第15回 まとめと振り返り

成績評価基準

授業参加度(30%)、授業内課題・発表(40%)、レポート(30%)

生成 AI が出力した文章・成果物をそのまま用いる行為は一切認めない。また、生成 AI を使用した場合は、使用状況について必ず報告すること。このルールに違反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

参考書

※特定の教科書は使用しないが、以下の書籍を参考書とする。
小柳かおる(2021)『日本語教師のための新しい言語習得概論(改訂版)』スリーエーネットワーク

鈴木孝明・白畑智彦(2012)『言葉の習得：母語獲得と第二言語習得』くろしお出版

Shawn Loewen(2022)『学びの場での第二言語習得論』佐野富士子、齋藤英敏、長崎睦子他(訳)、開拓社

前期課程
2期

日本語教育学研究 II
第二言語習得論

近藤 行人

授業概要並びに到達目標

第二言語習得研究においては多くが「認知」的な研究である。しかし、近年は第二言語習得研究の分野でも社会的転回が提唱され、言語学習の社会的側面を捉えることができるようになった。このような流れの中で、第二言語習得においても非認知的な視点を持った理論、実践、研究が求められている。本講義では、第二言語習得における社会的転回により台頭してきた社会文化的アプローチ、複雑系理論、アイデンティティ、生態学的アプローチなどについて理解を深め、それぞれの領域における研究の展開について議論する。

授業の一部では、論文講読を行う。担当箇所について各自が内容の要点と論点を提示したレジメを作成し、議論する。

なお、生成 AI が出力した文章をそのまま用いるなどの使い方は認めない。
生成 AI を利用した場合は、何にどのように使用したか、使用前と使用後のプロダクトを合わせて提出する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
第二言語習得研究における社会的転回
- 第2回 第二言語習得研究における社会的視点
- 第3回 第二言語習得と生態学的アプローチ(1)
- 第4回 第二言語習得と生態学的アプローチ(2)
- 第5回 第二言語習得と生態学的アプローチ(3)
- 第6回 第二言語習得と複雑系理論(1)
- 第7回 第二言語習得と複雑系理論(2)
- 第8回 第二言語習得と複雑系理論(3)
- 第9回 第二言語習得と社会文化的アプローチ(1)
- 第10回 第二言語習得と社会文化的アプローチ(2)
- 第11回 第二言語習得と社会文化的アプローチ(3)
- 第12回 第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(1)
- 第13回 第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(2)
- 第14回 第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(3)
※第14回は ZOOM によるオンライン双方向形式で実施します。
- 第15回 社会的転回後の第二言語習得研究

成績評価基準

授業参加(30%)、授業内課題・発表(40%)、期末レポート(30%)

生成 AI が出力した文章・成果物をそのまま用いる行為は一切認めない。また、生成 AI を使用した場合は、使用状況について必ず報告すること。このルールに違反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

参考書

Block, D (2003) The social Turn in Second Language Acquisition
Edinburgh University press.

Atkinson, D. (Ed). (2011) Alternative approaches to second language acquisition. Routledge.

馬場今日子・新多了(2020)『はじめての第二言語習得論講義：英語学習への複眼的アプローチ』大修館書店

前期課程
1期

日本語教育学研究 III
日本語教育評価法

近藤 行人

授業概要並びに到達目標

【授業概要】

日本語学習を評価することは、日本語学習の成果や学習者の成長を何らかの物差しで測ることである。この授業では、教育現場の実務において必要な評価の基礎知識と評価の実践についての様々な問題を取り上げる。学習者の学びを適切に評価するための手法を学び、どうすれば有用性の高い評価ができるのか、その手続きや実際の評価を通して検討し、その手法を修得する。

【到達目標】

日本語教育の評価に関する基礎的な知識を身に付け、実際の教育現場における評価を実施することができるようになる。

【準備学習】

講師から課される課題の取り組みなど、授業外でも他の履修者と協働して準備するなどの学習が求められる。

なお、生成 AI を利用した場合は、何にどのように使用したか、使用前のプロダクトと使用後のプロダクトを合わせて提出する。

以上について授業中に詳しく説明する。

授業計画

- 1回 オリエンテーション 評価のイメージ
- 2回 教育評価についての基礎知識(1) 診断的評価、形成的評価、総括的評価、目標基準テスト・集団準拠テスト、相対的評価・絶対的評価
- 3回 教育評価についての基礎知識(2) コミュニケーション能力
- 4回 教育評価についての基礎知識(3) シラバスの役割・成績判定と報告・有用性・波及効果
- 5回 テストを作る(1) テスト方針の決定、テストデザインの決定、テスト細目表、問題案の作成、問題案の検討、実施要項作成
- 6回 パフォーマンステスト(1) タスク(ロールプレイとスピーチ)
- 7回 パフォーマンステスト(2) 評価基準
- 8回 言語能力の指標 CEFR・JF スタンダード
- 9回 関連論文講読 CEFR に関する関連論文
- 10回 関連論文講読 Can-do Statements に関する評価

- 11回 パフォーマンステストの実施と評価
- 12回 テストを作る (2) テストの問題例：文法・語彙・文字のテスト
- 13回 テストを作る (3) テストの問題例：読解テスト・聴解テスト
- 14回 関連論文講読 評価者特性による評価のずれ
※第14回の講義は ZOOM によるオンライン双方向形式で実施します。
- 15回 テストを作る (4) テストをテストする

成績評価基準

授業への貢献度(20%)、課題(40%)、最終レポート(40%)で行う予定である。

生成 AI が出力した文章・成果物をそのまま用いる行為は一切認めない。また、生成 AI を使用した場合は、使用状況について必ず報告すること。このルールに違反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

教科書なし

参考書：

- ・近藤ブラウン妃美(2012)『日本語教師のための評価入門』くろしお出版
- ・村上京子他(2013)『テストを作る』スリーエーネットワーク
- ・国際交流基金(2011)『学習を評価する』国際交流基金
- ・野口裕之・大隅敦子(2014)『テストングの基礎理論』研究社

前期課程 2期 日本語教育学研究 IV 日本語教育評価法

近藤 行人

授業概要並びに到達目標

【概要】

Ⅱ期では、対話や協働を扱う評価や社会文化的アプローチによる評価、教室を離れた評価などの様々な「新しい評価」とされる文献を講読する。講読する文献は基本的には講師が選ぶが、受講者の希望等により、取り上げる内容を調整し、興味関心に沿った論文を講読することもある。

【準備学習】

発表準備等や、取り上げる論文を読むため、毎回 1～2 時間程度の準備を要する。受講者が準備する資料に基づいて教室活動を行うので、分担内容に責任を持つようにすること。

なお、生成 AI について、例えば、課題回答の作成時に生成 AI が出力した文章をそのまま用いるなどのような使い方は認めない。

生成 AI を利用した場合は、何にどのように使用したか、使用前のプロダクトと使用後のプロダクトを合わせて提出する。

以上について授業中に詳しく説明する。

授業計画

- 1 回 オリエンテーション
- 2 回 文献講読「アセスメントの歴史と最近の動向」
- 3 回 文献講読「CEFRにおける評価とアセスメント」
- 4 回 文献講読「ピアラーニングとアセスメント」
- 5 回 文献講読「ポートフォリオアセスメント」(1)
- 6 回 文献講読「ポートフォリオアセスメント」(2)
- 7 回 文献講読「ジャーナルアプローチとアセスメント」
- 8 回 文献講読「CEFR-CV における仲介」
- 9 回 文献講読「CEFR-CV における仲介を扱った研究論文」
- 10回 文献講読「対話的アセスメントの実践研究」(1)
- 11回 文献講読「対話的アセスメントの実践研究」(2)
- 12回 文献講読「外国人とのやりとりの経験は日本人の言語使用の意識を変えるか」
- 13回 文献講読「学生の評価観を理解する」
- 14回 文献講読「学習につながる自己評価－「生活のための日本語」教育の可能性－」
※第14回の講義は ZOOM によるオンライン双方向形式で実施します。
- 15回 まとめ 各自の研究の発表(調査、結果)、相互フィードバック

成績評価基準

授業への貢献度(20%)、担当箇所の発表(40%)、最終レポート(40%)で行う予定である。

生成 AI が出力した文章・成果物をそのまま用いる行為は一切認めない。また、生成 AI を使用した場合は、使用状況について必ず報告すること。このルールに違反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

教科書なし

参考書

- ・佐藤慎二・熊谷由里他(2010)『アセスメントと日本語教育 新し評価の理論と実践』くろしお出版
- ・宇佐美洋(編)(2015)『「評価」を持って街に出よう「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて』くろしお出版

前期課程 1期 日本語教育学研究 V 日本語教育実践研究

近藤 有美

授業概要並びに到達目標

本授業では、近年教育全般で注目を集めている「対話」に焦点を当て、ことばの教育における「対話」の重要性について、その本質を理解することを目指す。そのため、本授業では、「対話」に焦点を当てた教育の論考を講読し、それらをもとにクラスでディスカッションを行う。

課題として論文を読み、Google Classroom に「疑問点」「ディスカッションしたい内容」等を授業前にアップロードしておくこと、また、他の学生が Google Classroom にあげた内容について

ても目を通し、授業でディスカッションできるよう準備しておくことが求められる。

論文講読、ディスカッション内容の検討等、180分程度の事前準備を必要とする授業である。

※生成 AI の利用については、第 1 週のオリエンテーションで説明する。

授業計画

〈授業形態等〉

第14週のみオンラインで、その他は対面形式で行う。オンラインへのリンク情報、受講生への諸連絡は、Google Classroom で行う。履修者の確認ができた時点で Google Classroom への招待を行うので、授業開始前に承諾しておくこと。履修登録しているにも関わらず、授業開始の前日になっても招待が届かない場合は、授業担当者にメールで問い合わせること。

第 1 回 コースのオリエンテーション／教育観に関するディスカッション

第 2 回 第 1 章：なぜ今対話なのか 〈内容理解〉

第 3 回 第 1 章：なぜ今対話なのか 〈クラスディスカッション〉

第 4 回 第 1 章：なぜ今対話なのか 〈まとめ〉

第 5 回 第 2 章：対話のためのテーマとは何か 〈内容理解〉

第 6 回 第 2 章：対話のためのテーマとは何か 〈クラスディスカッション〉

第 7 回 第 2 章：対話のためのテーマとは何か 〈まとめ〉

第 8 回 第 3 章：対話をデザインする 〈内容理解〉

第 9 回 第 3 章：対話をデザインする 〈クラスディスカッション〉

第10回 第 3 章：対話をデザインする 〈まとめ〉

第11回 第 4 章：対話することばの市民へ 〈内容理解〉

第12回 第 4 章：対話することばの市民へ 〈クラスディスカッション〉

第13回 第 4 章：対話することばの市民へ 〈まとめ〉

第14回 〈オンライン〉著者との対話セッション

第15回 クラスディスカッション「学習者主体と言語教育」／まとめ

成績評価基準

論文講読課題(20%)、発表(30%)、ディスカッションへの参加・貢献(30%)、レポート(20%)

教科書(参考書)

細川英雄(2019)『対話をデザインするー伝わるとはどういうことか』ちくま新書

※その他、参考文献に関しては授業内で紹介する。

前期課程
2期

日本語教育学研究 VI
日本語教育実践研究

近藤 有美

授業概要並びに到達目標

〈授業概要・到達目標〉

2019年の入管法の改正、日本語教育推進に関する法律の公布・施行以降、日本語教育を取り巻く環境は大きく変化している。その後のパンデミックが国内外の日本語教育に与えた影響も大きい。また、機械翻訳など人工知能のめざましい発展は、言語教育のみならず教育全体に「学びの意義」を問いかけているようにも思われる。このような変化の中、言語教育は、「何のために教えるのか」を考える必要に迫られている。本授業では、「ことばの教育は何を目指すのか」に焦点をあてた論考を講読し、「何のために教えるのか」をクラス全体で議論する。最終的に、各自が自分の目指す日本語教育について言語化できることを目標とする。

※生成 AI の利用については、第 1 週のオリエンテーションで説明する。

授業計画

〈授業形態・準備学習等〉

講読課題として論文を読み、Google Classroom に疑問点、ディスカッションしたい内容等を授業前にアップしておくこと、また、他の学生が Google Classroom にあげた内容についても目を通し、授業でのディスカッションに向けて準備しておくこと。これらに180分程度の事前準備を必要とする。

第14週のみオンラインで、その他は対面形式で行う。オンラインへのリンク情報、受講生への諸連絡は、Google Classroom で行う。履修者の確認ができた時点で Google Classroom への招待を行うので、授業開始前に承諾しておくこと。履修登録しているにも関わらず、授業開始の前日になっても招待が届かない場合は、授業担当者にメールで問い合わせること。

第 1 回 コースのオリエンテーション／これまで受けてきた言語教育の振り返り

第 2 回 第 1 章：言語文化教育のはじまりと革新(内容理解)

第 3 回 第 1 章：言語文化教育のはじまりと革新(クラスディスカッション)

第 4 回 第 2 章：文化は教えられるか：見える／見えない文化と相互文化性のダイナミズム(内容理解)

第 5 回 第 2 章：文化は教えられるか：見える／見えない文化と相互文化性のダイナミズム(クラスディスカッション)

第 6 回 第 3 章：対話はことばの教育に何をもたらすか：ともに生きる社会における「かかわることば」とその対話環境づくりへ(内容理解)

第 7 回 第 3 章：対話はことばの教育に何をもたらすか：ともに生きる社会における「かかわることば」とその対話環境づくりへ(クラスディスカッション)

第 8 回 第 4 章：社会的行為主体としての「私」：日本語教育と日本研究を結ぶもの(内容理解)

第 9 回 第 4 章：社会的行為主体としての「私」：日本語教育と日本研究を結ぶもの(クラスディスカッション)

第10回 第 5 章：ことばの市民という生き方：市民性形成とことばの教育(内容理解)

第11回 第 5 章：ことばの市民という生き方：市民性形成とことばの教育(クラスディスカッション)

第12回 第 7 章：欧州評議会における言語政策と教育実践の意

味(内容理解)

第13回 第7章：欧州評議会における言語政策と教育実践の意味(クラスディスカッション)

第14回 〈オンライン〉著者との対話セッション

第15回 著者との対話セッションを終えて(クラスディスカッション)／総括

成績評価基準

講読課題(20%)、発表(30%)、ディスカッションへの参加・貢献(30%)、レポート(20%)

教科書(参考書)

細川英雄(2022)『対話することばの市民－CEFRの思想から言語教育の未来へ』ココ出版

※参考文献に関しては、必要に応じて授業で紹介する。

前期課程 日本語教育学研究Ⅶ 2期 データ分析法

籠宮 隆之

授業概要並びに到達目標

総合研究Ⅱ(量的研究法)に引き続き、文科系の大学院生を対象とした、統計学の授業である。

本講座では、フリーの統計ソフトを用いた統計処理を学ぶ。使用する統計ソフトは「R」または「JASP」を予定しているが、受講生の要望により柔軟に対応する。

さらに、多変量解析を用いたデータ解析手法についても学ぶ。講義科目ではあるが、コンピュータを用いた実習形式を交えて授業を進める予定である。

なお、総合研究Ⅱ(量的研究法)と併せて受講することが望ましい。

また、生成 AI については、課題回答の作成時に生成 AI が出力した文章を用いるなどの使い方は認めない。以上について第1回授業で詳しく説明する。

授業計画

以下の項目について、受講者の進度と関心に合わせ、取捨選択しながら授業を進める。

(15コマ)

1. 総合研究Ⅱ(量的研究法)の復習(記述統計)
2. 総合研究Ⅱ(量的研究法)の復習(統計的検定)
3. 二元配置分散分析
4. 相関係数の有意性検定と統計的検定における効果量
5. 統計ソフト R または JASP の基本的な使い方(プログラム言語の基礎概念を含む)
6. 統計ソフト R または JASP を用いた統計的検定(t検定)
7. 統計ソフト R または JASP を用いた統計的検定(分散分析と多重比較)
8. 回帰分析の基礎
9. 統計ソフト R または JASP を用いた回帰分析(単回帰分析、重回帰分析、変数選択)

10. 統計ソフト R または JASP を用いた様々な回帰分析(非線形回帰分析)
11. 統計ソフト R または JASP を用いた多変量解析(主成分分析)
12. 統計ソフト R または JASP を用いた多変量解析(因子分析)
13. 統計ソフト R または JASP を用いた多変量解析(判別分析)
14. 受講者自身の研究テーマに則った実習1(※オンライン形式で開講)
15. 受講者自身の研究テーマに則った実習2

成績評価基準

受講者各自の研究テーマに則って統計的な分析を行ったレポートにより評価する。

なお、生成 AI が出力した文章・成果物をそのまま用いる行為は一切認めないこのルールに違反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

教科書：

栗原伸一(2021)『入門 統計学(第2版)検定から多変量解析・実験計画法・ベイズ統計学まで』、オーム社

参考書：

山田剛史・杉澤武俊・村井潤一郎(2008)『Rによるやさしい統計学』、オーム社

金明哲(2007)『Rによるデータサイエンスーデータ解析の基礎から最新手法まで』、森北出版

清水優菜・山本光(2020)『研究に役立つ JASP によるデータ分析ー頻度論的統計とベイズ統計を用いてー』、コロナ社

前期課程 日本文化研究Ⅰ 1期 日本文化論

齋藤 綱

授業概要並びに到達目標

【授業概要並びに到達目標】

本講義は国際文化論を手法とし、文化理論の基礎と理論の発展過程について学ぶことを目的とする。特に「文化接触」「文化変容」の理論については東アジア地域の文化関係を主体に社会的課題点を挙げ、日本と他の国・地域に跨る文化的諸問題について考察をおこなう。

【授業方法】

- ・使用ツール：Google classroom
- ・講義、文献購読、ディスカッションを中心として講義を進めていく。
- ・生成 AI について、次のような使い方は認めない。例えば、課題の理解や整理をするために資料を要約する、課題回答の作成時に生成 AI が出力した文章を用いるなど。

授業計画

- 第1回 授業の概要説明と各週のスケジュール確認、受講者の学習背景
- 第2～4回 文化的諸要素に関する概念
- ①文化の概念
 - ②文化概念に関する文献講読－1
 - ③文化概念に関する文献後続－2
- 第5回 「ことばと文化」「言語と文化」(3) 文献紹介、ディスカッション 文化の視野を広げる
- 第6回 文献講読(1) 第2章「国際関係における文化」国際関係における文化：平野健一郎(2000)『国際文化論』東京大学出版会
- 第7回 文献講読(2) 第3章「文化の変化」
- 1. 内発的变化と外発的变化
 - 2. 文化進化論
- 第8回 文献講読(3)
- 3. 文化変容論
- 第4章「文化の接触と変容－文化触変」
- 1. アカルチュレーション研究の登場
- 第9回 文献講読(4)
- 2. 外来文化要素の伝播と選択
 - 3. 文化運搬者
- 第10回 講義「日本の近代化と異文化接触」
- 第11回 プレゼンテーションに向けて(1)
- 日本文化をテーマとし、文化触変についてプレゼンテーションをおこなう(報告+ディスカッション)
- プレゼンテーションの趣旨：文化に対する複眼的な視野と知識を共有し、日本社会・日本文化に対する思考を深めていくためのグループ内ディスカッション、また全体のディスカッションの活性化を目指したい。
- 第12回 「主要文献の収集状況の確認、テーマの具体化」
- 考察ポイントについてのディスカッション
- 第13回 「PPT、配布資料の準備、質疑応答の準備」
- 第14回 「プレゼンテーション(1)」(オンライン)
- 報告時間：30分、論点の整理とディスカッションの準備(10分)、ディスカッション：40分、フィードバック：10分
- 第15回 「プレゼンテーション(2)」(全体のまとめ)
- 報告時間：30分、論点の整理とディスカッションの準備(10分)、ディスカッション：30分、フィードバック：10分

成績評価基準

課題20%、文献講読20%、プレゼンテーション30%、レポート30%

注意：本授業では、生成 AI の利用を全面的に禁止する。したがってこのルールに違反した場合(例えば課題や小レポートの回答作成で利用したり、生成 AI の生成物をそのまま提出したりした場合)は、単位の不認定等、適切な措置を取る。

教科書(参考書)

授業内容に応じて参考文献を紹介し、資料を配布する。

前期課程 2期

日本文化研究Ⅱ 日本文化論

齋藤 絢

授業概要並びに到達目標

地理的に日本と朝鮮半島の歴史的関係は深く、日韓関係、日朝関係には常に変化が伴う。特に現代社会での課題の多くに近代に生じた政治的・社会的・文化的問題が関係しており、個と集団の狭間にある多様な文化的課題を解決することは容易ではない。本講義では日本と朝鮮半島を主体とする東アジアの文化関係を取り上げ、日韓の社会的課題点を捉え、考察の手法・知識を習得することを目標とする。とりわけ日韓大衆文化に関する両国の文化政策と文化交流の現場を中心に、どのように両国が文化的関係性を構築してきたのかを考察する。講義では日本語・韓国語文献の収集と講読をおこない、ディスカッションを通じて受講者間の考察の視点を学んでいく。

注意：生成 AI の利用を全面的に禁止する。

授業計画

各週学習テーマ

- 第1回 授業の概要説明と各週のスケジュール確認、受講者の学習背景
- 第2回 文化の理論、日韓文化関係
- 第3回 大衆社会と文化1－大衆文化(講義)
- 第4回 大衆社会と文化2－映像の視聴(1)
- 第5回 大衆社会と文化3－映像の視聴(2)
- 第6回 大衆文化論に関する文献講読：学習者1
- 文化論／異文化接触／大衆文化を中心とした学術分野のなかで学習者の研究テーマに関連した文献を選択し、文献紹介・ディスカッションのテーマ共有を中心に授業を展開する。
- 第7回 大衆文化論に関する文献講読：〃
- 第8回 大衆文化論に関する文献講読：学習者2
- 第9回 大衆文化論に関する文献講読：〃
- 第10回 大衆文化論に関する文献講読：学習者3
- 第11回 大衆文化論に関する文献講読：〃
- 第12回 大衆文化論に関する文献講読：学習者4
- 第13回 大衆文化論に関する文献講読：〃
- 第14回 日韓文化関係についてディスカッション－戦後の日韓関係と文化政策、日流・韓流(オンライン)
- 第15回 全体のまとめ

成績評価基準

各回授業参加への積極性…30%

文献講読(文献紹介、小発表の質、議論の質)…40%

レポート…30%

注意：本授業では、生成 AI の利用を全面的に禁止する。したがってこのルールに違反した場合(例えば課題や小レポートの回答作成で利用したり、生成 AI の生成物をそのまま提出したりした場合)は、単位の不認定等、適切な措置を取る。

教科書(参考書)

講義内容に応じて参考文献を紹介し、資料を配布する。

前期課程 1期 日本文化研究 Ⅲ 日本文学研究

エリス 俊子

授業概要並びに到達目標

文学を読む

文学とは何か。文学言語とは？

文学を読むとはどのような体験か。文学を批評するとはどのような行為か。

文学をめぐる基本的な問いについて、考える。

主に近代日本文学を中心に、具体的なテキスト分析を行う。
希望があれば、映画や美術など、文学以外の表現芸術についても触れる。

文学をまったく読んだことのない人、文学に詳しい人、共に歓迎します。予備知識は不要。

多様なバックグラウンドと関心をもつ参加者が一緒に読むことによってさまざまな発見があると思います。

*授業の発表やレポート作成にあたり、生成 AI を使用することは全面的に禁止する。

[準備学習] 授業で指定された作品を読み、各自のコメントをまとめる。(180分/週)

授業計画

参加学生と相談の上、適宜変更する。

- 1 導入
- 2 文学言語について
- 3 文学の読み方
- 4 俳句
- 5 和歌
- 6 近代詩
- 7 小説
- 8 批評の方法 (1)
- 9 批評の方法 (2)
- 10 比較文学比較文化へのアプローチ
- 11 文学と美術
- 12 文学と映画
- 13 作品分析：分担発表
- 14 ディスカッション：ジャンルの違いと批評について(オンライン)
- 15 小プレゼンテーション：各自の研究課題に結びつけて

成績評価基準

授業参加・期末レポートなどの総合評価

授業での発表及び期末レポート作成に際して AI が出力した文章や成果物を用いることを一切認めない。このルールに反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

適宜指示する。

前期課程 2期 日本文化研究 Ⅳ 日本文学研究

エリス 俊子

授業概要並びに到達目標

第1期は文学およびその隣接領域についてさまざまなアプローチからの批評の仕方を取りあげたが、今学期は、言語芸術としての詩のことばを関心の中心に据え、細かいテキスト分析を行う予定である。詩的言語の可能性や詩的表現と歴史状況とのかかわりなど、一篇の詩からどのような声が聞こえてくるか、そこからどのような世界観、人間観が見えてくるか、意見を交わしながら丁寧にテキスト読みを進める。予備知識は必要ない。受講者の関心によって他ジャンルのものを扱う希望があれば、それぞれの研究課題を考慮しつつ、適宜スケジュールに組み込む。

授業は対面形式で行うが、第14週のみオンラインで行う。

*授業の発表やレポート作成にあたり、生成 AI を使用することは全面的に禁止する。

[準備学習] 指示されたテキスト読み、あらかじめコメントを用意して授業でのディスカッションに備える。(180分/週)

授業計画

1. 導入：詩とは何か
2. 私の研究関心 (1)
3. 私の研究関心 (2)
4. 日本語近代詩の読み方
5. 共同テキスト分析—身体への違和感と格闘する詩人
6. 共同テキスト分析—社会への違和感と格闘する詩人
7. 共同テキスト分析—ことばにならない思いを叫びつづける詩人
8. 共同テキスト分析— 声を出しつづける詩人
9. 共同テキスト分析— 声を失ってゆく詩人
10. 研究発表 (1)
11. 研究発表 (2)
12. 研究の方法—さまざまな分析の仕方
13. 研究の方法—論文の書き方
14. 個別指導(課題を持ち寄り、オンラインでのディスカッション形式)
15. 振り返り／総合討論

成績評価基準

授業参加とレポートの総合評価

授業での発表及び期末レポート作成に際して AI が出力した文章や成果物を用いることを一切認めない。このルールに反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

適宜指示する。

前期課程 グローバルスタディーズ研究 II 1期 国際マクロ経済とグローバルビジネス

複数教員制

真家 陽一、林 慶雲

授業概要並びに到達目標

日本経済のグローバル化が進展する中、国際マクロ経済およびグローバルビジネスを学ぶ重要性が高まっている状況を踏まえ、マクロ・ミクロの両面から国際マクロ経済およびグローバルビジネスに関する理解を深めることを目指す。

前半の講義では、国際マクロ経済学について学んでいく。具体的には、日本経済との結びつきが強いいくつかの国・地域をピックアップし、その国の経済事情やビジネス慣行、代表的な企業のグローバル経営についてケーススタディを行う。後半の講義では、世界第2位の経済大国であり、日本との経済関係も緊密な「中国」とのビジネスを中心に、ケーススタディを行う。本講義は学生の主体的かつ積極的な参加を強く求めるため、履修前に経済・ビジネスに関する十分な知識を習得済みであることが望ましい。今年度は原則として対面による授業を実施する。ただし、第14回はオンラインとする。

授業計画

- 1回 オリエンテーション(林、真家)
- 2回 アメリカの経済事情(林)
- 3回 Southwest Airline の企業経営(林)
- 4回 Walt Disney の企業経営(林)
- 5回 Starbucks の企業経営(林)
- 6回 ASEAN の経済事情(林)
- 7回 インドの経済事情(林)
- 8回 オーストラリアの経済事情(林)
- 9回 ケーススタディ①(概論、自動車)(真家)
- 10回 ケーススタディ②(電機)(真家)
- 11回 ケーススタディ③(化学、医薬)(真家)
- 12回 ケーススタディ④(卸売・小売①スーパー・コンビニ)(真家)
- 13回 ケーススタディ⑤(卸売・小売②アパレル・生活用品)(真家)
- 14回 ケーススタディ⑥(食料品)(真家)
- 15回 課題演習と後半の授業のまとめ(真家)

成績評価基準

前半の講義は、毎回の講義で簡単な感想文を書いてもらい、前期のレポートを提出することを求める。感想文及びレポートに基づいて評価する。

後半の講義は、毎回の講義に基づく学生からと発表と討論への

取り組み状況および課題演習などによって総合的に評価する。
生成 AI の利用については、別途指示する。

教科書(参考書)

前後半の講義とも、教科書は使用せず、プリントを配布する。

前期課程 グローバルスタディーズ研究 IV 1期(集中) 公共政策とガバナンス

平山 恵

授業概要並びに到達目標

公共政策の理論に関する文献購読を行いながら、学生に身近な課題についての政策策定手法の模擬演習を行う。

公共政策関連の専門知識を得るとともに、政策的思考を行うことができる能力を得ることを目的とする。

生成 AI の使用については、授業内で適宜指示する。

授業計画

1. 「公共政策」とは何か
2. 国際公共政策
3. 演習：理念設定
- 4～5. 政策の決定
6. 演習：現状把握
7. 課題別政策：安全保障
- 8～9. 政策の決定
10. 演習：未来予測
11. 安全保障
12. 地球環境
13. 演習：方策設定
14. 学生の発表
15. 総括

成績評価基準

輪読分担及び討論を通じた知識理解 40%、政策手法演習 40%、政策分析発表および他の学生へのコメント 20%

教科書(参考書)

庄司真理子、宮脇昇、玉井雅隆 編著『新グローバル公共政策』
晃洋書房 2021

前期課程 グローバルスタディーズ研究 V 1期(集中) 国際社会と国際法

山形 英郎

授業概要並びに到達目標

国際社会の平和と安全を維持するために国際連合が設立された。国際連合憲章は、武力行使を禁止し、集団安全保障体制を導入し、国際平和を維持する制度を構築した。しかし、現実には、国連創設以来武力行使の事例は枚挙にいとまがない。国際法の基本原則である武力行使禁止原則を中心に、国連安全保障

体制について理解し、現実には生起している武力紛争について国連憲章を正しく適用することができる能力を身につける。その上で、国際法を通して国際社会の実態を分析することができるようになることを目標とする。

毎回、参加者との対話を通じて授業を進めていく。講義を行うが、受講する学生から随時質問を受け付け、回答を行う。疑問点を残さないよう授業を進めていきたい。

授業計画

01. 国際法の基礎を学び、国連集団安全保障体制を概観する。
02. 国際連盟の集団安全保障体制を理解し問題点を分析する。
03. 国際法上の基本原則である武力行使禁止原則を解剖する。
04. 武力行使禁止原則の例外である自衛権について検討する。
05. 個別的自衛権と集団的自衛権発動の要件を比較検討する。
06. 主権平等から導き出される不干渉原則を理解し運用する。
07. 国連憲章第6章における平和的紛争解決制度を概観する。
08. 国連安保理及び総会における決定手続きを十分理解する。
09. 冷戦期における安保理麻痺に対する対処方法を研究する。
10. 平和維持活動が第6章半の措置と呼ばれる理由はなにか。
11. 安全保障理事会が制裁措置を執るのはどのような場合か。
12. 安全保障理事会が軍事的強制措置を執るための要件とは。
13. 軍をもたない国連が軍事的強制措置を執るにはどうする。
14. 非軍事的強制措置の実態を検証し法的問題点を洗い出す。
15. 以上の検討を踏まえ、ウクライナ紛争を法的に分析する。

成績評価基準

国際法に関する基礎的な知識を得ていれば(C)。その知識を具体的な事例に適用できれば(B)。国家間あるいは研究者の間で意見が相違する点を理解した上で、自己の見解を提示できれば(A)。レポートから判断する。生成 AI をレポート作成に利用すれば失格とする。自分の言葉で作成すること。

教科書(参考書)

David Harris and Sandesh Sivakumaran ed., Cases and Materials on International Law 8th ed., Sweet & Maxwell (2015). ただし購入の必要はない。

参考書として、松井芳郎『武力行使禁止原則の歴史と現状』日本評論社(2018)、山形英郎編『国際法入門』(第3版)法律文化社(2021年)。

前期課程 グローバルスタディーズ研究 VI 2期(集中) 開発とグローバルイシュー

佐藤 都喜子

授業概要並びに到達目標

授業概要：

社会開発に係るグローバル・イシューについて議論する。特に今日の主要課題の一つであるグローバル格差とジェンダーの問題に注目する。国際協力に関心あるひとのみならず、途上国・中進国から来る外国人と接する機会の多い多文化共生の活動に携わる方々にも資する内容である。

授業では、長年国際協力の現場で働いた講師の経験をもとに、臨場感ある授業を進める。また、ゲスト・スピーカーとして、プラン・インターナショナルの理事長であり、元国連人口基金東京事務所長であった池上清子氏を迎える予定である。

到達目標：

グローバルイシューに関する現状を踏まえた上で、地球上の80%以上が途上国・中進国に居住すると言われる今日において、広い視野で世界情勢を見つづ、グローバルシティズンの一員としての自身の見識を高めることをめざす。

授業計画

・授業方法：

対面授業(14回目のみ、オンライン授業)、講義、抄読を中心に進めながら、適宜、テーマに沿った事例をもとにグループ討議を行う。

生成 AI の利用については、自身が取り組むテーマや文献に関する情報収集の用途のみであること。それ以外の利用は不可。たとえば、課題の理解や整理をするために資料を要約する・翻訳する、課題やレポート作成時に生成 AI が出力した文章を用いること。利用の際には、信頼のおける複数の情報源を用いて確認すること。

・授業計画：

- 第1回 オリエンテーション、開発問題概観、開発のアクター(ODA、二国間援助、NGO・NPO)
- 第2回 開発のアクター(国際機関)、様々な開発論とその変遷
- 第3回 参加型アプローチ、参加型アプローチの事例研究：何が間違いだったのか？
- 第4回 日本の国際協力の視点、人間の安全保障
- 第5回 動画：いま国際協力に何が求められているのか？
- 第6回 グローバリゼーション、貧困と格差：アフリカ、東南アジアの事例
- 第7回 グローバリゼーションの事例研究：マレーシアの零細農民
- 第8回 友松：序章、1章
- 第9回 友松：2～3章
- 第10回 友松：4～5章
- 第11回 友松：6～7章
- 第12回 ジェンダー、ジェンダーの分析手法、事例研究：バングラデシの農村女性の健康
- 第13回 ジェンダーと開発、WID から GAD への変遷、事例研究：ヨルダン女性のエンパワメント(黎明期：動画、活躍期：パワポで説明)
- 第14回 ゲスト・スピーカー(池上清子氏)
- 第15回 ジェンダー・公衆衛生・リプロダクティブヘルスの事例研究：さてどうしようか？ 現場とともに…

成績評価基準

- ・授業内のディスカッション参加度(50点)
- ・プレゼンテーションの内容(50点)

なお、生成 AI が出力した文章や成果物をそのまま用いる行為

は一切認めない。このルールに違反した場合は、単位の不認定等適切な措置をとる。

教科書(参考書)

- ・教科書：
友松夕香(2025)『グローバル格差を生きる人びと―「国際協力」のディストピア』岩波新書
- ・その他の必要資料は授業で配布
- ・参考図書：
勝俣誠(1993)『アフリカは本当に貧しいのか』朝日新聞社
西川潤ら(2011)『開発を問い直す』日本評論社
北野収(2017)『国際協力の誕生』創生社
紀谷昌彦、山形辰史(2019)『私たちが国際協力する理由』日本評論社
(字数制限のため、参考図書の副題省略)

前期課程 1期	ワールドヒューマニティズ研究Ⅰ グローバルヒストリー研究
------------	---------------------------------

鈴木 茂

授業概要並びに到達目標

新しいマイノリティ論によって注目を集めている Justin Gest (ジャスティン・ゲスト) の Majority Minority (New York: Oxford University Press, 2022) を輪読します。
米州(ニューヨーク、トリニダード・トバゴ)、中東(バーレーン)。インド洋(モーリシャス)、東南アジア(シンガポール)、太平洋(ハワイ)のうちから選んだ章を読み、日本との比較を意識して、マイノリティー論のグローバルな展開を理解することが目標です。
合わせて、学術論文の形式、文体、語彙に慣れることも目標とします。
生成 AI の利用については、授業時に指示します。

授業計画

- 具体的な事例とし挙げられている米州(ニューヨーク、トリニダード・トバゴ)、中東(バーレーン)。インド洋(モーリシャス)、東南アジア(シンガポール)、太平洋(ハワイ)から受講者と相談して決めます。毎回、受講者に内容の要約を中心とする報告をお願いし、討論を行います。
- 第1回 イントリダクション(講義)
 - 第2回 報告と討論1
 - 第3回 報告と討論2
 - 第4回 報告と討論3
 - 第5回 報告と討論4
 - 第6回 報告と討論5
 - 第7回 報告と討論6
 - 第8回 報告と討論7
 - 第9回 報告と討論8
 - 第10回 報告と討論9

- 第11回 報告と討論10
- 第12回 報告と討論11
- 第13回 報告と討論12
- 第14回 報告と討論13(オンライン)
- 第15回 まとめ

成績評価基準

平常点で評価します。

教科書(参考書)

- Justin Gest, Majority Minority (New York: Oxford University Press, 2022).
- こちらで用意します。
- 参考書：ジャスティン・ゲスト『新たなマイノリティの誕生：声を奪われた白人労働者たち』弘文堂、2019年

前期課程 1期(集中)	ワールドヒューマニティズ研究Ⅱ 多言語多文化研究
----------------	-----------------------------

奈良 雅美

授業概要並びに到達目標

グローバル化の拡大と深化とともに変容を続ける世界において、多様な文化と言語の人々があるいは多様な主体が影響を及ぼし合っている。この授業では、これらの事象を重層的で動的な関係性として捉え、「多文化社会」をより深く理解できるよう、分析視点を広げる。
コースの前半は、国際文化論、国際社会論の視点から、「多文化社会」を位置付けて解説する。後半では、日本の多文化社会をジェンダーの視点から捉え、グローバル化の中で、多文化共生がジェンダー平等とどう融合しうるのかを考える。
授業の目標は、第一に「多言語・多文化」に係る事象を俯瞰して理解する力を養うこと、第二に、多言語・多文化の社会の諸課題をジェンダーの視点で理解できるようになることである。

授業計画

- 1 授業の概要、進め方、授業意図のバックグラウンドの説明など
- 2 国際文化論からの考察①文化とはなにか
- 3 国際文化論からの考察②グローバル化の中の文化
- 4 国際文化論からの考察③文化の変化
- 5 国際文化論からの考察④文化の接触と変容
- 6 国際文化論からの考察⑤文化の受容と抵抗
- 7 国際文化論からの考察⑥人の国際移動
- 8 ジェンダーとはなにか
- 9 ジェンダーと多文化共生①ジェンダー平等との関連性
- 10 ジェンダーと多文化共生②対立あるいは変容
- 11 ジェンダーと多文化共生③複合差別
- 12 事例：日本に住むフィリピン女性のライフヒストリーを読む(教科書指定『そうしてサンパギータは神戸にいる』より)
- 13 事例：日本に住むフィリピン女性のライフヒストリーを読む(同上)

- 14 事例：日本に住むフィリピン女性のライフストーリーを読む(同上)
- 15 全体の振り返りとディスカッション
- *授業の進行状況により順番を入れ替えたり、内容を変更する場合もある。
- *生成 AI の使用は自由。(言うまでもないが、使用にともなう責任はすべて各自が負う)

成績評価基準

平常点40%(ディスカッションでの意見、対話の状況から)
レポート60%(最終回で課題を提示する)

教科書(参考書)

教科書

奈良雅美『そうしてサンパギータは神戸にいる』金木犀舎、2025年

参考文献

平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000年
関根政美『エスニシティの政治学』名古屋大学出版会、1994年
辻村みよ子・大沢真里編『ジェンダー平等と多文化共生』東北大学出版会、2010年

前期課程 2期 ワールドヒューマニティズ研究 III 宗教・民族・エスニシティ

高村 美也子

授業概要並びに到達目標

この授業では、エスノグラフィーおよび人類学の手法を用いて、世界の宗教、民族、エスニシティの概念を学び、アフリカおよびヨーロッパを中心とした各地域の社会の実態を学ぶ。

15回の講義を通し、世界で起こっている社会の現状と問題を発見し、それをどのように捉えていくか考察する。

受講生は、世界で起こっている民族問題について、日ごろから着目しておく。

講義、ディスカッション、映像視聴、講読および発表、レポート執筆を実施する。

発表およびレポートに関しては、各受講生が注目している国内外問わず、地域民族の課題について執筆する。

第14回はオンラインで実施。

AI の使用に関して、発表用には使用不可。授業中の確認事項においては使用可能。

授業計画

- 1 講義内容の説明と計画
- 2 世界の民族とエスニシティ
- 3 国家、国民、民族
- 4 世界の言語
- 5 世界の宗教 1 文明と 3 大宗教
- 6 世界の宗教 2 人類学で扱われる宗教
- 7 民族の土着信仰、慣習

- 8 大航海時代から現在の人の移動
- 9 ディアスポラの人びとの暮らし
- 10 宗教・民族・エスニシティ(発表) ①
- 11 宗教・民族・エスニシティ(発表) ②
- 12 宗教・民族・エスニシティ(発表) ③
- 13 宗教・民族・エスニシティ(発表) ④
- 14 移住先での宗教実践 オンライン
- 15 宗教・民族・エスニシティ(発表) ⑤

成績評価基準

課題・レポート 40%

平常点(各講義課題への対応状況) 60%

教科書(参考書)

なし 随時配布

前期課程 2期 ワールドヒューマニティズ研究 IV 世界文化と表象

長畑 明利

授業概要並びに到達目標

- ・英語圏のモダニズムとその後の革新的な文学(innovative literature)に見られる翻訳と外国語の使用について考察する。
- ・到達目標は、①英語圏のモダニズムとその後の革新的な文学(innovative literature)について解説ができること、②革新的な文学に見られる翻訳と外国語使用の諸例について解説ができること、また、その意味について考えを述べるができること、③革新的文学および関連文献の英語に習熟することである。
- ・各回の授業は講義と担当者による報告および議論により進める。担当者はリーディング課題について、作品・作者紹介、翻訳と外国語使用についての考察、自分なりの論点を含む報告を行い、質問に答える。その際、必要に応じて、ハンドアウトまたはスライドを用意する。担当者以外の受講者はリーディング課題を読んだ上で授業に出席し、議論に加わる。

授業計画

- ・導入に続く14回の授業で以下のトピックとテキストを扱う計画である。和訳のあるものについては、英語テキストに加え、和訳も参考にする。第14回の授業はオンラインで実施する。

- 第1回 導入
- 第2回 Modernism について
- 第3回 Ezra Pound による Bertrand de Born、Bernart de Ventadorn の詩の翻訳
- 第4回 Ezra Pound, Cathay
- 第5回 Ezra Pound, Awoi no Uye
- 第6回 Ezra Pound, “Canto I”; “Canto IV”
- 第7回 T. S. Eliot, The Waste Land
- 第8回 Basil Bunting, “Chomei at Toyama”

- 第9回 Gary Snyder, “Miyazawa Kenji” (The Back Country)
第10回 Kenneth Rexroth, The Love Poems of Marichiko
第11回 Rosemarie Waldrop, A Key into the Language of America
第12回 Caroline Bergvall, “Via”
第13回 Theresa Hak kyung Cha, Dictée
第14回 Yoko Tawada, “St. George and the Translator”
第15回 最終発表

(*) 扱うトピックまたはテキストを変更することがある。

成績評価基準

授業点60%、期末レポート40%。60点以上を合格とする。5回以上欠席した場合、単位取得の意思がないものとする。AI 使用については第1回目の授業時に説明する。

教科書(参考書)

教科書：自主教材

参考書：

- ・ Baker, Mona, ed. Critical Readings in Translation Studies. New York: Routledge, 2010.
- ・ Venuti, Lawrence, ed. The Translation Studies Reader, 2nd ed. New York: Routledge, 2004.
- ・ Yao, Steven G. Translation and the Languages of modernism: Gender, “Politics,” Language. New York: Palgrave, 2002.
- ・ その他、授業中に紹介する。

前期課程 1期	ワールドヒューマニティズ研究 V 世界文学と批評
------------	-----------------------------

木村 茂雄

授業概要並びに到達目標

世界の英語文学の解釈や批評について学びます。カリブ、アフリカ、インドなど、旧大英帝国植民地の作家による英語文学(いわゆるポストコロニアル文学)や、日系アメリカ人作家の短編小説を取り上げます。これらの作品を、歴史、社会、文化、人種・民族、ジェンダーなど、さまざまな視点から検討することにより、文学作品だけではなく、広い意味での文化的・社会的なテキストを解釈し、批評する力を身につけることを目標にします。受講生は、授業で取り上げるテキストを丁寧に予習して授業に臨みます。授業はゼミ形式で、作品の内容、解釈、疑問点などについて話し合っていきます。

* この授業における発表やレポートの作成等に生成 AI を利用することは全面的に禁止します。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
第2回 Jean Rhys, “The Day They Burned the Books”
第3回 V.S. Naipaul, “The Baker’s Story” ①
第4回 V.S. Naipaul, “The Baker’s Story” ②
第5回 Ngugi wa Thiong’o, “A Meeting in the Dark” ①

- 第6回 Ngugi wa Thiong’o, “A Meeting in the Dark” ②
第7回 Abioseh Nicol, “The Truly Married Man” ①
第8回 Abioseh Nicol, “The Truly Married Man” ②
第9回 Saadat Hasan Manto, “Toba Tek Singh” ①
第10回 Saadat Hasan Manto, “Toba Tek Singh” ②
第11回 Hisaye Yamamoto, “The Streaming Tears”
第12回 Violet Harada, “The Shell Gatherer”
第13回 Dean Takehara, “Counting Song” ①
第14回 (オンライン)Dean Takehara, “Counting Song” ②
第15回 まとめ、学期末レポートの準備

成績評価基準

発表など授業への取り組み 60%、学期末レポート 40%

教科書(参考書)

教材はプリントで配布します。参考書は適宜授業で示します。

前期課程 2期	ワールドヒューマニティズ研究 VI トランスレーション研究
------------	----------------------------------

甲斐 清高

授業概要並びに到達目標

「文芸翻訳の理論と実践」

この授業は、翻訳という行為にともなう諸問題を検討しながら、英語で書かれた文学作品を日本語に翻訳する実践を通して、実践的な翻訳力を身につけていくことを目的とする。単に英文を日本語で解釈するのではなく、実際の「翻訳」とはどのようなものかを意識的に考察していく。文芸翻訳の特殊性を理解するために、他のジャンルのテキストも翻訳の題材とする。授業の中、および課外で、文学作品の翻訳を進めていき、最終的にレポートを添えて翻訳作品を提出する。

受講者は、毎週与えられる翻訳課題を完成させて、次の授業にのぞまなければならない。

授業は、対面で行うが、資料の配布や課題の提出等は、Google Classroom から行う。

第14週は、Zoom を使ってオンラインでの授業となる。

本授業における生成 AI の使用の可否および範囲については、授業内で別途指示する。

授業計画

- 第1週 イントロダクション：翻訳とは何か
第2週 直訳と意訳
第3週 辞書やその他のツールの活用
第4週 語句の意味と翻訳
第5週 起点テキストの種類、翻訳の目的
第6週 翻訳実践(省略)
第7週 翻訳実践(品詞の転換)
第8週 翻訳実践(順送りと逆送り)
第9週 翻訳実践(複雑な文への対応)
第10週 翻訳実践(話法)
第11週 翻訳実践(無生物主語、態)

- 第12週 翻訳実践(文化の違い)
第13週 翻訳実践(表記の問題)
第14週 翻訳実践(推敲)[オンライン]
第15週 まとめ

成績評価基準

授業内での取り組み40%、翻訳作品とレポート60%。

教科書(参考書)

プリント配布。

前期課程 1期 情報コミュニケーション研究 I ジャーナリズム・メディア論

鶴本 花織

授業概要並びに到達目標

映画・広告・漫画などのビジュアルテキストを研究資料としてどう扱うべきかが特に20世紀後半以降に学問的に議論された。その結果として考案された分析方法を「記号学分析」と呼ぶが、この授業では、記号学分析の手法を教授するとともに、フェミニズム映画理論の中でとりわけ開発が進んだ精神分析学的映画理論に特化して授業を運営する。

ビジュアルテキストを用いて研究を進めることを視野に入れている場合は、この授業を受けると良いだろう。

授業では、映画をネタにした記号学分析の実演を教員が行ったり、教員が選んだ映画をネタにグループ・ディスカッションをしたりする。また、受講生が選んだ映画を用いて個人発表を行い、学習成果を示す。

授業計画

〈導入〉

1. オリエンテーション：記号学分析とは
2. 記号学分析の基礎：ノーノー・ボーイの表象
3. 記号学分析の基礎：ティーン・フリックの表象

〈ホラー映画〉

4. ローラ・マルヴィ「視覚的快楽と物語映画」(1975)について
5. バーバラ・クリード「Horror and the Archaic Mother : Alien」
6. ブラッハ・L・エッティンガー『Matrixial Gaze』(1995)について／事例映画：『羊たちの沈黙』(1991)

〈現代家族〉

7. 『ジョーカー』2019の記号学分析
8. 『パラサイト半地下の家族』2019のディスカッション

〈戦争映画〉

9. 反戦映画に関するディスカッション／事例映画：『西部戦線異状なし』2022

〈救世主としての女性〉

10. 『プロミシング・ヤング・ウーマン』2020
11. 『ラブリー・ボーン』2009
12. 学生お薦め作品
13. 学生お薦め作品

14. 学生お薦め作品(オンライン)
15. 学生お薦め作品

本授業では、生成 AI の利用を全面的には禁止しない。ただし、レポートや課題の作成において生成 AI を使用する場合は、参考・補助的な利用に限る。また、使用した場合には、利用箇所および利用方法を明記しなさい。生成 AI が作成した文章をそのまま提出物として使用することは認めない。提出物の内容についての最終的な責任は受講者本人にある。不適切な利用が確認された場合は、不正行為として扱うことがある。

成績評価基準

グループ・ディスカッションおよび個人発表。

教科書(参考書)

クラスルームにデジタル版を挙げる。

前期課程 2期 情報コミュニケーション研究 II 情報システムと AI

大野 欽司

授業概要並びに到達目標

AI は、あらゆる分野で革命的な変化をもたらしています。本科目は AI 技術の基礎と活用の習得を目的とします。2025 年からアカデミアに無料提供されている JMP Statistical Discovery によるデータサイエンスを最初に学習します。引き続き、AI 開発に必要な Python 言語と Python Libraries による programming を習得します。さらに、深層学習による画像 AI、機械学習による教師あり学習、機械学習による教師なし学習、説明可能 AI の習得を目指します。

生成 AI の利用については全面的に可とします。パイプコーディングによるプログラミング技術や、生成 AI によるプログラムエラー検出手法を習得し将来にわたり生成 AI を積極的に活用してください。生成 AI は生産性をあげるために学生時代に習得すべき必須の技術です。

授業計画

第 1 回 演習環境設定

- ・ JMP 環境設定、Python 環境設定、Google Colaboratory 環境設定

第 2 回 JMP を使ったデータサイエンス /Data science with JMP 1

- ・ Supervised learning (決定木解析、ロジスティック回帰)

第 3 回 JMP を使ったデータサイエンス /Data science with JMP 2

- ・ Unsupervised learning (主成分分析、k-means 分析、階層的クラスター分析)

第 4 回 パイソンプログラミング /Python programming 1

- ・ 変数、演算、リスト、タプル、辞書

第 5 回 パイソンプログラミング /Python programming 2

- ・ 制御構造、関数

- 第6回 パイソンプログラミング /Python programming 3
・ Python libraries (pandas, seaborn)
- 第7回 パイソンプログラミング /Python programming 4
・ Python libraries (numpy, matplotlib)
- 第8回 ニューラルネットワーク /Neural network 1
・ 活性化関数・損失関数・最適化関数
- 第9回 ニューラルネットワーク /Neural network 2
・ Tensorflow/keras による文字認識モデル構築
- 第10回 教師あり学習 /Supervised learning 1
・ Scikit learn による線形回帰と決定木
- 第11回 教師あり学習 /Supervised learning 2
・ Scikit learn によるロジスティック回帰とサポートベクターマシン
- 第12回 教師あり学習 /Supervised learning 3
・ Scikit learn によるランダムフォレストと勾配ブースティング
- 第13回 教師なし学習 /Unsupervised learning 1
・ Scikit learn による主成分分析
- 第14回 教師なし学習 /Unsupervised learning 2 (オンライン開講)
・ Scikit learn による k-means 分析、階層的クラスタ分析
- 第15回 説明可能 AI/Explainable AI (XAI)
・ permutation importance, SHAP, LIME による特徴量評価

成績評価基準

受講態度(出席、発言、質問等) (40%)、毎回の演習課題 (60%) で総合的に評価する。

教科書(参考書)

なし

前期課程
2期

情報コミュニケーション研究 IV
スピーチ・プレゼンテーション

Alessandro G. Gerevini

授業概要並びに到達目標

魅力的なスピーチやプレゼンテーションの力を身につける科目です。日本語、あるいは英語によるスピーチ・プレゼンテーションを実践的な形で指導します。話し方、姿勢、ジェスチャー、観客への視線、間の取り方、服装などのノン・バーバル・コミュニケーションと、発声・滑舌、話の速度、話の流れの中で協調すべきところなどのバーバル・コミュニケーションの両者に関するスキルアップを目指します。演劇学校などで用いられる実習も取り入れる予定ですので、学生の積極的な参加が期待されます。

- ・ 準備学習時間：180分
- ・ 履修者の自己紹介の指導から始まる予定ですので、初回まで数分程度のスピーチを準備してください。
- ・ 授業実施方法：第1?13週間及び最終回の第15週間の授業は対面で行います。しかし第14週間はオンラインで行う予定です。
- ・ 生成 AI の利用については、限定的に可とします。

授業計画

初回の後、特に優れたスピーチを例として扱いながら、重要なポイントや構成パターンを徹底的に分析します。即興のスピーチを練習する目的でも、履修者全員にウタ・ハーゲン氏の、観客への視線の大切さを学ぶ実習をしてもらう。そして各自で準備したスピーチやプレゼンテーションを発表してもらう。その内容に関しては特に決まりはなく、参加予定のスピーチコンテンツの原稿でも、他の授業中に発表する予定のプレゼンテーションでもどれでも結構です。使用言語は日本語もしくは英語、どちらでも可能です。各自のプレゼンテーションのテーマについての指導はしないものの、その内容が観客に理解されているか、また魅力的な形で届けられているかを確認します。履修者数によって、授業計画全体の微調整もあり得る。

- 第1回 コース・オリエンテーション、学生の自己紹介
- 第2回 国内外のスピーチ・プレゼンテーション観賞とその分析①
- 第3回 国内外のスピーチ・プレゼンテーション観賞とその分析②
- 第4回 ウタ・ハーゲン氏の実習①
- 第5回 ウタ・ハーゲン氏の実習②
- 第6回 インプロビゼーション(即興)の実習
- 第7回 ブリーフィング(グループ別指導)
- 第8回 学生のスピーチ・プレゼンテーション1 (グループA)
- 第9回 学生のスピーチ・プレゼンテーション1 (グループB)
- 第10回 学生のスピーチ・プレゼンテーション1 (グループC)
- 第11回 ブリーフィング(個人指導)
- 第12回 学生のスピーチ・プレゼンテーション2 (個人A)
- 第13回 学生のスピーチ・プレゼンテーション2 (個人B)

- 第14回 (オンライン方式)
学生スピーチ・プレゼンテーション2(個人C)
第15回 まとめ

成績評価基準

授業参加における積極的な態度 40%
スピーチ・プレゼンテーションの練習 60%

教科書(参考書)

教科書は使用しません。
必要に応じて教員がプリントを配付します。
参考書：ウタ・ハーゲン著、シカ・マッケンジー訳『“役を生きる”演技レッスン—リスペクト・フォー・アクティング』フィルムアート社、2010

前期課程 2期 情報コミュニケーション研究 V 英語通訳スキル

浅野 輝子

授業概要並びに到達目標

- 国際社会で活躍できる通訳 基礎知識からトレーニング法まで
- 1：このクラスは、通訳の基礎理論を習得した後、逐次、同時通訳ができるまでの能力を養成することを目的とした通訳コースである。
 - 2：名古屋外国語大学主催で毎年開催している「全国学生通訳コンテスト」のスク립トをまとめた「通訳ワークブック」をテキストに、多文化社会の現場での逐次通訳スキルを音声教材を用いて指導する。
 - 3：国際化が進むにつれて、異文化コミュニケーターとしての通訳の需要は年々高まってきている。このコース終了後、学生が国際会議などのボランティア通訳、ガイド通訳エスコート通訳として活躍できるようになる事。

基本は日進キャンパスのE30同時通訳室にて対面で行いますが、14回目の授業はオンライン(Zoom)で行います。
尚、AIの利用については、第一週のオリエンテーションで説明する。

授業計画

- 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション
第2回 1-1. 人工知能とテクノロジー
第3回 1-2. どのように医学は変化を遂げているか？
第4回 1-3. 芸術はどのように影響されるか？
第5回 1-4. 人工知能が与える政治システムへの影響
第6回 2-1. 用語の整理—元号とは
第7回 2-2. 平成の幕開け(1989年1月8日)
第8回 2-3. バブルの崩壊(平成3年)
第9回 2-5. 地下鉄サリン事件(平成9年)
第10回 3-1. 用語の整理・パンデミックの歴史
第11回 3-2. Covid-19の始まり

- 第12回 3-3. 「ステイホーム」へ変化した生活スタイル
第13回 3-4. 医療現場とその諸問題
第14回 3-5. 「世界保健機関(WHO)」の役割(オンライン)
第15回 総まとめ

成績評価基準

授業中の通訳訓練および態度、宿題の評価を全体の40%、通訳実技を60%とする。

教科書(参考書)

「キーワードで現代を伝える 通訳ワークブック2」浅野輝子
他、名古屋外国語大学出版会

前期課程 2期 情報コミュニケーション研究 VI 中国語通訳スキル

楊 紅雲

授業概要並びに到達目標

授業概要：
本講義は、中国語通訳に必要な理論知識の習得と実践的技術、技能の養成を目的とする。具体的には、日中ビジネス、法律法規、医薬医療、観光案内、健康美容、映像文芸など諸分野において担当教員が長年経験してきた通訳の事例を紹介し、解説する。講義内容に合わせて実践的通訳トレーニングを行う予定、学生には関連する専門用語の事前学習及びロールプレイ、ディスカッションへの積極的な参加を求める。なお、この科目は中国語を母語とする学生を受講対象としている。
第14週目は、大学の方針によりオンライン授業とする(Google Classroom)。
生成AIの利用については、全面的に禁止する。成績評価の面からも公平性が保てないからである。

- 到達目標：
- (1)中国語通訳スキルの基礎知識を習得すること。
 - (2)日中通訳に必要な技術、技能を訓練すること。
 - (3)中国語⇔日本語の変換力を鍛えること。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(概説)
第2回 中国語通訳基礎(1)：通訳者としての教養
第3回 中国語通訳基礎(2)：逐次通訳・同時通訳
第4回 通訳の技術(1)：商談(会議・セミナー)通訳
第5回 通訳の技術(2)：工場(製造ライン・見学)通訳
第6回 通訳の技術(3)：レセプション(展示会)通訳
第7回 通訳の技術(4)：司法(捜査・弁護・法廷)通訳
第8回 通訳の技術(5)：観光(案内・ショッピング)通訳
第9回 通訳の技術(6)：医療(医薬・診療)通訳
第10回 通訳の技術(7)：美容(コスメ・施術)通訳
第11回 通訳の技術(8)：映像(ロケ探し・製作現場)通訳
第12回 発表(1)：模擬通訳ロールプレイ
第13回 発表(2)：模擬通訳ロールプレイ

第14回 翻訳の仕事：中国映画(ドラマ)字幕翻訳(オンライン)

第15回 まとめ(レポート)

成績評価基準

授業への貢献度(40%)、発表(30%)、レポート(30%)

教科書(参考書)

教科書：使用しない(資料を配付する)

参考書：

- ・高田裕子・毛燕『日中・中日通訳トレーニングブック』大修館書店
- ・窪田守弘・楊紅雲他『映画でチャイニーズ』南雲堂フェニックス出版
- ・楊紅雲『帝國的銀幕—十五年戦争与日本电影』中国電影出版社